

ユーゴスラヴィア国家の基本問題

材 木 和 雄

1 問題の所在

ユーゴスラヴィアとは「南スラヴ人の国」を意味する。地理的にはヨーロッパの南東部、バルカン半島中西部に広がる地域を指す言葉であり、そこにはスラヴ語系の言語を話す人びとが多く住んでいる。このうち主要な民族であるセルビア人とクロアチア人はほぼ同じ言語を使用する。スロヴェニア人は、セルビア人やクロアチア人とはやや異なった言葉を使すが、彼らは相互に意思疎通が可能である。しかし、各地域に割拠する南スラヴ人は7世紀に定住を完了して以来、近代に至るまで独自の歴史を歩んできた。何よりも彼らは共通の国家を形成したことがなかった。19世紀の初めには南スラヴ人は大別するとオーストリア＝ハンガリー領とオスマン・トルコ領に別れて居住し、相互に没交渉の状態であった。

南スラヴ人は、宗教、文字、文化的伝統、社会構造などの点でも大きな相違があった。19世紀という諸民族の覚醒の時代には、これらの相違は個別の民族意識を成長させるモメントとなった。しかしながら、南スラヴ人としての類縁性は、同じ時期に南スラヴ統一主義（ユーゴスラヴィズム）の思想を発展させた。ユーゴスラヴィアという言葉を使い、南スラヴ人統一国家構想を最初に提唱したのは、19世紀後半のクロアチア人の政治指導者であったヨシプ・シュトロスマイエル司教（1815－1905）である。彼は、すべての南スラヴ人を独立で自由な国家的・民族的な共同体に統合することを最終目標とした。この共同体（ユーゴスラヴィア）は、各民族を完全に対等・同権の関係におき、各民族の主要な支配地域に国家としての自立性と自治権を保証する連邦制的な統一国家であった。

第一次世界大戦末期、オーストリア＝ハンガリー帝国の敗戦が決定的に

なるにつれて、同地域の南スラヴ人の中で統一国家形成の気運が高まった。国家統合の第一段階は、1918年10月29日に実行されたオーストリア＝ハンガリー領の南スラヴ人諸地域の分離独立であり、彼らはクロアチアの首都ザグレブで「スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人の国家」の樹立を宣言した。これは最初のユーゴスラヴィア国家であった。この国家は、1918年12月1日にセルビア王国と合併し、全南スラヴ人の居住地域をほぼ包摂するユーゴスラヴィア国家が誕生した。正式な名称は、「セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人の王国」である。

問題はここからであった。企業にせよ、自治体にせよ、合併の実現に至るまでは双方共に都合よく期待を膨らませて、将来をバラ色に考えやすい。その結果、ユーフォリアからさめるとき、理想と現実のギャップを見せつけられ、こんなはずではなかったと大きくとまどうということはよくある話である。これは国家の合併の場合も同様である。オーストリア＝ハンガリーとオスマン・トルコという文化や政治的伝統が大きく異なる二つの文明世界に属していた諸地域が合体したユーゴスラヴィアはまさにその典型的ケースであった。

旧オーストリア＝ハンガリー領の南スラヴ人は、セルビア王国との国家統合の際、憲法制定議会が最終的に国家制度の決定をおこなうまでの過渡期の期間では、各地方の自治権が従来どおりに維持されることを求め、それはセルビア側代表も了解したと考えていた。したがって、統一国家は少なくとも当分の間、単一国家ではあるが連邦制に近い国家形態をとると彼らは思い込んでいた。しかし、セルビア側代表はそのような了解をした覚えはなかった。これはそのとおりであり、実際に何の協定文書も存在しなかった。そのため、セルビア側は、旧オーストリア＝ハンガリー領の南スラヴ人諸地域をセルビア王国の中に統合しようとする彼らの国家構想が暗黙の承認を得たと考えていた。1918年12月1日の国家統合のセレモニーは同床異夢のもとに進められたのである。振り返れば、問題の発端は、セルビアの首都ベオグラードに派遣された旧オーストリア＝ハンガリー領の代

表団が、セルビアとの国家統合の枠組みについて事前に明確に定められた指針¹を携えていながらも、これに沿ってセルビア側と交渉をおこなわなかったことであつた。もちろん、このことの背景には、国家統合の実現が双方にとって急務の課題であつたという事情があるが、彼らの行動は禍根を残す不作為となつた。その結果、「スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人の国家」はセルビア王国と無条件に等しい形で国家統合をおこなうことになり、当時の両者の力関係によって、その後の統一国家の建設はセルビア側が事実上の主導権を握る形で実行されることになった。セルビア人もクロアチア人もこのことに触れたがらないが、私がみるところでは、国家統合の枠組みをセルビア側と明確に取り決めなかつたことは、旧オーストリア＝ハンガリー領の南スラヴ人代表が犯した歴史的なボーンヘッドであつた。ユーゴスラヴィアの国家制度をめぐるセルビア人とクロアチア人との長年にわたる争いは、まさにここから始まることになったからである。

新しく誕生した統一国家が旧オーストリア＝ハンガリー領諸地域を統合していく際に、イデオログの役割を果たしたのが、急進党と共に政権を担った民主党の指導者スヴェトザール・プリビーチェヴィッチである。クロアチア出身のセルビア人であつたプリビーチェヴィッチは、かつては旧オーストリア＝ハンガリー領南スラヴ人の有力な政党指導者であり、独特のユーゴスラヴィア主義を信条とすることで名を馳せていた。というのは、ユーゴスラヴィア思想の創始者であるシュトロスマイエルは、スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人が祖先を同じくする兄弟民族であるという見地に立っていたが、南スラヴ各民族の歴史的・文化的な独自性を認め、すでに述べたように、諸民族の同権と連邦主義的な国家制度によるユーゴスラヴィア国家を構想した。ところが、プリビーチェヴィッチは、セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人が歴史的に引きずってきた相違を抹消し、南スラヴ人をあらゆる意味で単一の民族（ユーゴスラヴィア人）に統合することを理想とした。そのため、個別の民族意識を温存・助長するような地方の分離主義的な動きを遮断するために、厳格な中央集権

主義の原則で単一国家の形成をおこなうことを強く主張したのである。

単一民族国家の形成をめざすプリビーチェヴィッチのユーゴスラヴィア主義は超民族主義の主張であり、個別の民族主義である大セルビア主義とは似て非なるものではあったが、その中央集権主義の国家構想は旧オーストリア＝ハンガリー領の統合をめざすセルビア王国の指導者にとって、好都合なものであった。内相に就任したプリビーチェヴィッチの主導の下に、ベオグラード政府は統一国家の中央集権化に着手した。彼らは、旧オーストリア＝ハンガリー領各地域の自治権を否定し、地方政府を中央政府の出先機関のような存在に変えた。旧来どおりの自治権が維持されることを期待した旧オーストリア＝ハンガリー領の南スラヴ人は、まもなくそれが幻想であったことを悟った。

旧オーストリア＝ハンガリー領の南スラヴ人のうち、中央集権主義にもっとも大きな不満を抱いたのはクロアチア人であった。クロアチアは、旧オーストリア＝ハンガリー領内のスラヴ人地域の中で国家に準ずる地位を認められていた唯一の地域であったからである。正式の名称は「クロアチア・スラヴォニア・ダルマチア三位一体王国」と呼ばれ、国王はオーストリア皇帝が兼任していた。1867年にハプスブルク帝国がオーストリア＝ハンガリー二重帝国に再編された際、クロアチアおよびスラヴォニアはハンガリーの支配下におかれる地域になったが、クロアチア議会はハンガリー政府と協定を結び、自治王国としての地位と内政上の自治権を認めさせてきた。クロアチア人はこの地位と自治権をクロアチアの国法上の権利（国権）と呼んできた。しかし、統一国家の形成後にベオグラード政府がとった中央集権化と強権的な反対勢力の弾圧政策は、クロアチア人が誇りにする「国権」を完膚なまでに踏みにじるものとなった。

しかし、ユーゴスラヴィアの国家制度はまだ暫定的なものにとどまっていた。それは、国家の基本法である憲法が制定されていなかったからである。憲法を制定するには、総選挙をおこない憲法制定議会を召集する必要がある。憲法制定議会の議員は普通選挙によって選出されることになっ

ていた。この点は極めて重要である。なぜなら、1918年12月1日にユーゴスラヴィア諸地域の国家統合を決めた政治家はみな制限選挙のもとで選ばれた政党指導者であったからである。したがって、ユーゴスラヴィアの国家秩序はまだ民意による認証を受けていなかった。

普通選挙は、ユーゴスラヴィアの政界において、中央集権主義の急先鋒であった民主党の勢力を後退させ、新しい有力政党を出現させた。とりわけ、共産党の躍進は大きな驚きであり、政府にとって脅威となった。クロアチアではステパン・ラディッチ率いるクロアチア大衆農民党が民衆の支持を集めて躍進し、主要な民族政党となった。ベオグラード政府は、憲法制定議会において、君主制と中央集権制を基礎づける憲法の制定に成功したが、反対勢力を意識するあまり、国王に議会を超越するような絶対的な権限を付与した。これに対して、ラディッチは他のクロアチア人小政党を糾合してクロアチア・ブロックを形成し、クロアチアには統一国家の正当性を認めない、反中央集権主義の勢力が割拠することになった。他方、憲法制定後のベオグラードでは、急進党が勢力を拡大し、民主党との勢力争いが表面化していた。両党は連立政権を組んでいたが、相互のライバル関係のゆえに、お互いにこれまでの連立の相手を見捨てて、ラディッチに対して手を結ぶ意思があることを示した。その際、交渉のテーマとして浮上したのが中央集権的な国家制度の変更であり、これを規定する憲法の修正であった。いずれにせよ、総選挙と憲法の制定を経て、大戦間期のユーゴスラヴィアをつねに不安定にしてきた重大な国内問題の所在が明確になり、この問題の解決をめぐる駆け引きをおこなう主要な主体が出そろった。

南スラヴ人のナショナリズム研究で名高いイヴォ・バナッツが指摘するように²、1918年12月の国家統合に始まり1921年6月の憲法制定によって中央集権的な国家体制が固まるこの期間は、ユーゴスラヴィアの民族問題の原点が形成された時期に当たる。とりわけ、中心的な問題であるセルビアとクロアチアの対立の原点が形成されたことは重要である。しかし、その後この問題がどのような展開を見せたのかについては通史書などでは簡

単な記述ですまされている。そのため、セルビア人とクロアチア人は当初から和解しがたい対立関係にあったかのようなイメージが流布しているが、これは誤解である。むしろ、これから述べるように、ユーゴスラヴィアの民族間関係からみて不自然な国家が形成され、政治的不安定が続いたがゆえに、問題の解決をめざして、セルビア人とクロアチア人の間で対話を模索する動きが始まることになるのである。

以下では、憲法制定の過程をもう少し詳しく説明し、そのうえで主として1922年後半のセルビア人とクロアチア人との接触の過程に焦点を当てて、その交渉がどのように進み、挫折したのかを明らかにしていくことにしたい。

2 ヴィードヴダン憲法の成立

1918年12月の国家統合（「セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人の王国」の建国宣言）から数ヶ月、ベオグラード政府は、中央集権的な国家制度の枠組みを瞬く間に築き上げた。だが、この国家制度はまだ暫定的なものにとどまっていた。それは、国家の基本法である憲法が制定されていなかったからである。国家統合時の合意によれば、講和条約の締結後6ヶ月以内に憲法制定議会を召集することになっていたが、憲法制定議会の議員を選出する選挙が実施されたのは、国家統合から2年が経過した1920年11月末のことであった。

総選挙の実施が遅れた理由の一つは、新国家の国境が未画定であり、いくつかの地域は外国の占領下にあつて選挙区や有権者の確定に支障があつたことである。新国家は、隣接するイタリア、オーストリア、ハンガリー、ルーマニア、ブルガリア、ギリシア、アルバニアと国境を画定する必要があつた。これらの国々との国境確定は1919年1月に始まったパリ講和会議の中で議論されたが、新生ユーゴスラヴィアにとって最大の難題は、1915年のロンドン条約を根拠に、イタリアがアドリア海沿岸ならびに島嶼部の

領有を頑強に主張して譲らなかつたことである³。「セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人の王国」(以下、「南スラヴ人王国」と記す)は、オーストリアとのサン＝ジェルマン条約⁴(1919年9月10日)、ブルガリアとのヌイイ条約(1919年11月27日)、ハンガリーとのトリアノン条約(1920年6月4日)で大方の国境を画定したが、イタリアとの国境画定は最後まで合意に達せず、両国は個別に協議することになった⁵。その結果、1920年11月12日のラパロ条約によってようやく妥協的解決が決定した⁶。

しかし、総選挙が先延ばしにされた理由は国境画定問題だけではなく、もう一つの大きな理由は、旧セルビア王国の主要政党が政権抗争を再燃させ、互いに足を引っ張り合ったため、選挙の枠組みがなかなか決まらなかったことである。旧セルビア王国の政党は、第一次世界大戦前から、ニコラ・パシッチを党首とする与党の急進党と、急進党の路線に反発する野党勢力とが激しい政権抗争を繰り広げてきた。南スラヴ人統一国家の成立後、両陣営は呉越同舟で連立政権を組んでいたが、他方で彼らは来るべき選挙での勝利をめざして、新たな同盟者を求めた。リュバ・ダヴィドヴィッチを中心とする旧セルビア王国の野党勢力は、旧オーストリア＝ハンガリー領南スラヴ人の有力な政治指導者スヴェトザール・プリビーチェヴィッチの結成した民主党に合流して、臨時国民議会の第一党を構成した。急進党は首相ポストこそ確保していたが、閣僚の過半数を民主党に握られ、政治の主導権を事実上、民主党に奪われていた。旧オーストリア＝ハンガリー領の統治政策をめぐる、強権政策の維持を主張する内相プリビーチェヴィッチと対立した首相のスタン・プロティッチは、クロアチア人政党やスロヴェニア人政党と連携することによって民主党に対抗しようとした。しかし、国家元首を代行する摂政アレクサンダルの支持を得たプリビーチェヴィッチらの勢力は強力であり、プロティッチは、閣内不一致を理由に1919年8月、首相を辞任した。これに代わって、民主党のダヴィドヴィッチを首班とする政権が誕生し、急進党は野党に転じた。しかし、この内閣は議会で急進党を始め諸政党の激しい抵抗に遭い、しばしば

立ち往生した。そのため、この内閣は勅令で議会を一時閉会したあげくに、さしたる仕事をすることなく辞職に追い込まれた⁷。このあと政権は急進党に移り、プロティッチが首相の座に復帰したが、野党に転じた民主党は議会の審議を妨害し、議会は機能不全の状態が続いた。

南スラヴ人王国の内政が多少とも安定し始めたのは、1920年5月、パリ講和会議に参加していたミレンコ・ヴェスニッチを摂政アレクサンダルが呼び戻し、首相に任命してからである。ヴェスニッチは、アレクサンダルの意向に沿って、急進党と民主党との連立政権を復活させた。ヴェスニッチは外交官として長らく国外に滞在し、国内の政権抗争に直接の関係のなかった人物であった。アレクサンダルは、彼を首相に据えることで、諸政党の指導者に挙国一致内閣の復活を求めたのである⁸。1920年9月2日、臨時国民議会は憲法制定議会の議員を選出するための選挙法を採択し、ここによりやく総選挙の実施と施行細目が決まった⁹。

1920年11月28日、南スラヴ人王国誕生後、最初の国政選挙が実施された。22の政党と政治集団が候補者名簿を提出したが、議席を獲得したのは16であった。政党別の得票数、得票率、議席数は次のとおりである。

表1 1920年11月28日の憲法制定議会選挙結果

政 党	得票数	得票率	議 席
民主党	319448	19.9	92
急進党	284575	17.7	91
共産党	198756	12.4	58
クロアチア大衆農民党	230590	14.3	50
農業者党	151603	9.4	39
スロヴェニア人民党	58971	3.7	14
クロアチア大衆党	52333	3.3	13
ユーゴスラヴィア・ムスリム組織 (JMO)	110895	6.9	24
社会民主党	46792	2.9	10
クロアチア農夫党	38400	2.4	7
ジェミイット党	30029	1.9	8
クロアチア同盟	25867	1.6	4
共和党	18136	1.1	3
クロアチア権利党	10880	0.7	2
人民社会党	6186	0.4	2
無所属 (アンテ・トルムビッチ)	6581	0.4	1
セルビア自由党	5061	0.3	1
投 票 総 数	1607265		419

選挙結果について、第一に指摘しなければならないのは、投票率の低さである。有権者数2480623に対して、投票者数は1607625、投票率は65%であった。有権者の3分の1は投票に行かなかった。初の普通選挙であったにもかかわらず、全般に有権者の政治不信は強かったとみることができ¹⁰。第二に連立政権を構成していた二大政党の民主党と急進党は、両方を併せても議会の過半数の議席を獲得できなかったことである。民主党は単独では最多の92議席を獲得したが、その獲得議席数は党幹部の期待を大幅に下回った¹¹。民主党は、中央集権主義の維持、耕作者を重視する土地改革、共産主義運動に対する闘いなどを選挙戦で有権者にアピールし、ユーゴスラヴィア主義を標榜する政党として全国あらゆる地域に候補者を立てて、大量議席の獲得をめざした。しかし、その結果は臨時国民議会発足時の議席（総数296のうち115）をも下回る議席数となり、この2年間の彼らの政策に対する有権者の厳しい審判を示すものとなった。他方、急進党は91議席を獲得し、臨時国民議会の69議席よりも大幅に議席を増やしたが、地盤とする旧セルビア王国の選挙区では得票と議席が伸び悩んだ。ただし、急進党が民主党と拮抗する議席を獲得したことは、連立政権内部の力関係に変化をもたらした点で重要であった。

これとは対照的に大きな躍進を遂げたのは、共産党、農民政党、イスラム政党であった。共産党は旧セルビア王国およびモンテネグロだけで36議席を獲得し、とくにマケドニアでは15議席を獲得して急進党や民主党の議席を上回った。これはこの地域における反政府意識の強さを物語っていた。同様に農業者党も、セルビアおよびスロヴェニアで、農業政策や土地改革に対する零細農民層の期待を集めて議席を伸ばした。ボスニア・ヘルツェゴヴィナでは、イスラム教徒が強い政治的凝集力を示して宗教政党であるユーゴスラヴィア・ムスリム組織を躍進させた。これは中央政府がイスラム教徒の利益や文化的独自性を軽視しがちであったことに対する抗議の表れであった。

クロアチア大衆農民党は統一国家の成立以前は小政党にすぎなかった

が、国家統合後にいち早く断固たる反政府運動を展開して、中央政府の強権支配に悲鳴を上げていたクロアチア人民衆、とくに農民の支持を集めて急速に勢力を伸ばしていた。ただそれだけにこの党は早くから中央政府の厳しい弾圧を受けた。党首のステェパン・ラディッチは政治犯として長らく投獄されていたし¹²、この選挙でも官憲の監視の下で際だった運動を展開することができなかった。クロアチア大衆農民党が候補者を立てたのはクロアチアとスラヴォニアの選挙区だけであり、ラディッチが国王の恩赦によって釈放されたのは投票の前日であった。したがって、この党がこれほどの得票と議席を得るとはベオグラード政府は予想していなかった。ところが、クロアチア大衆農民党は農村部で圧倒的な強さを発揮し、組織や資金力で勝る既成政党を押しよけて、一躍クロアチアを代表する政党になった¹³。

ベオグラード政府はクロアチア大衆農民党の動向に警戒感を強めた。この党は、クロアチアの南スラヴ人王国への統合を認めず、「国際的に承認された南スラヴ人国家の国境の中でクロアチアを中立の農民共和国として樹立する」という立場に立っていたからである。12月8日、クロアチア大衆農民党は党の総会を開いた。彼らは、今回の選挙はユーゴスラヴィアの国家形態を国民に問いかける住民投票であり、クロアチア大衆農民党の勝利は彼らの主張をクロアチア人の大多数が支持したことを意味しているという声明を発表した¹⁴。この総会では、ラディッチの提案により、クロアチア大衆農民党は、クロアチアを農民主体の主権共和国としてユーゴスラヴィアの中に樹立するという党の立場を鮮明にするため、党名を「クロアチア共和農民党」に変更した。クロアチア共和農民党は、採決の方式を変更しない限り、憲法制定議会に参加しないと表明して、当選した議員をベオグラードに派遣しなかった。彼らの求める国家形態の決定方式は、議会における多数決による採決ではなく、民族代表間の交渉と協定の締結であった。クロアチア共和農民党に同調して、クロアチア権利党も議会に議員を派遣しなかった。

1920年12月12日、憲法制定議会は召集された。憲法制定議会の最初の仕事は、議会の規程の制定であった。これからどのような規則や手続きにしたがって憲法を作成していくのかは重大な問題であったため、その審議は政治的色彩を帯びて冒頭から紛糾した。

第一の問題は、議会在規程を自らの手で定めるのではなく、政府が作成した規程を議会に押しつけようとしたことである。これは手続き上も不備があった。選挙法によれば、政府は臨時国民議会の委員会との合意の上で憲法制定議会の規程を定めることになっていたが、政府は臨時国民議会が解散したあとの12月8日に単独でこの規程を制定したからである。しかも、この規程によれば、当選した議員は国王に忠誠を誓った後に初めて議員資格が認証されることになっていた。国王に対して忠誠を誓うことは、国家の政体に関して、君主制を暗黙の前提として憲法草案の作成に参加することを意味した。しかし、これでは憲法制定議会は自由に議論をおこなって国家制度を決定する場ではなくなってしまうので、共産党を筆頭に、共和党、社会民主党など共和制国家を求める政党が強く反発し、規程を議会の手で作り直すことを求めた。これに対して政府の見方はこうであった。1918年12月1日に旧オーストリア＝ハンガリー領の南スラヴ人の全権代表とセルビア側の全権代表を前にして摂政アレクサンダルがおこなった「セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人の王国」の建国宣言によって、この国は君主制国家として確立している。したがって、憲法制定議会は国家を一から作り直すような権限をもたないし、国王の地位を変更することはできない。憲法制定議会はこの王国の内部組織と機能を定めるだけである¹⁵。

第二に政府が作成した規程は、議会の定数の過半数の賛成によって憲法を採択することを定めていた。これは相対的多数の議席をもつセルビア人政党に有利に働くことが予想されたので、スロヴェニア人民党、クロアチア同盟、ボスニア・ヘルツェゴヴィナのイスラム教徒を代表するユーゴスラヴィア・ムスリム組織は、三分の二の賛成が必要との立場を主張した。

さかのぼれば、1917年7月に旧オーストリア＝ハンガリー領南スラヴ人の政治結社であるユーゴスラヴィア委員会とセルビア政府が南スラヴ人統一国家の建国に合意した文書であるコルフ協定は、来るべき憲法制定議会在「質的多数決」によって国家の形態を決定することを求めている。これは、少なくともユーゴスラヴィア委員会の側では、単純多数決ではなく、セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人の三民族それぞれの過半数の合意による決定を意味すると理解されていた。オーストリア＝ハンガリーからのクロアチア国家の独立と南スラヴ人合同国家への参加を宣言した1918年10月29日のクロアチア議会の決議でもこの立場は受け継がれていた。ところが、ヴェスニッチ政府、およびこれを引き継いだパシッチ政府はコルフ協定やクロアチア人の見地を否定し、単純過半数による採決を主張した¹⁶。

野党の徹底した抗議にもかかわらず、政府は規程の撤回に応じる態度は示さなかった。政府がこの規定に固執した背景にはクロアチア共和農民党の存在があった。野党の求めに応じて国王に対する忠誠条項を削除すれば、クロアチア共和国の代表を名乗るクロアチア共和農民党の議員が王国を承認することなく議会に参加する道を開く恐れがあったからである。もしラディッチらが議会に来れば、議会内部の勢力関係が大きく変わり、また彼らはその公言する主張に沿って、憲法制定議会の決定方式の変更を求めてくることは必至であった。

政府を支える民主党と急進党の議席は議会の過半数に達していなかったため、反対勢力が一致結束すれば規定は否決され、憲法制定議会の審議は空転する恐れがあった。この窮地を救ったのは農業者党であった。彼らは憲法の審議を急がなければならないという理由から、政府の規定案の賛成に回った¹⁷。結局、1921年1月25日、政府は内容面ではほぼ同一の規程を再提出した。彼らは、農業者党の賛成を得て議会の過半数を確保し、1921年1月28日、これを議会で採択することに成功した¹⁸。

1921年1月31日、この規程に沿って議会内部に憲法委員会が設置された¹⁹。憲法委員会はただちに憲法草案を議員に募った。委員会が設定した

提出期限はわずか14日間にすぎなかった。それでもこの短い期日のうちに9つの草案が寄せられた²⁰。ところが、これらの草案の中から今後の審議のたたき台として2月16日に委員会が採択したのは、政府案のみであった。このあと4月5日まで委員会は政府案の内容に対する審議を続けた。委員会での議論の最大の争点は、国家制度であった。第一に政府案は国家の政体として君主制を前提とし、しかも議会に優先する大きな権限を国王に認めていた。しかし、これには共産党、共和党、社会民主党が強く反対し、共和制を求めた。次に意見が分かれたのは国家の内部構造であった。この年の始めに首相に就任したニコラ・パシッチが提出した政府案は、現行の国家制度を制度化するために、厳格な中央集権主義の立場を特徴としていた。しかもこの草案は、自然的・社会的・経済的条件にしたがって国土を35（後に33）の行政単位に細かく分割し、国家統合以前の歴史的な伝統をもつ地域の境界（スロヴェニア、クロアチア、ダルマチア、ボスニア・ヘルツェゴヴィナなど）を徹底的に破壊することを予定していた。これに対して、クロアチア人とスロヴェニア人の代表政党（国民クラブとユーゴスラヴ・クラブ）は、旧オーストリア＝ハンガリー領時代に認められていた歴史的な地域の境界を維持し、これを領域とする地方政府およびその自治権を復活させようとした。ボスニア・ヘルツェゴヴィナのイスラム教徒を代表するユーゴスラヴィア・ムスリム組織も、中央集権主義には反対しないとしながらも、ボスニア・ヘルツェゴヴィナの行政単位としての一体性の維持を求めた。委員会での審議の結果、政府は当初の案に大幅な加筆修正をおこなった²¹。だが、国王の地位と権限に関する規定と中央集権的な権力構造に関する規定には本質的な変更を認めなかった。

ところで、ここで注意を喚起すべき重要な事実がある。それは、1921年2月16日の憲法委員会における政府原案の採決の結果は、賛成23に対して反対19と「微妙な僅差」であった点である。憲法委員会は42人の委員で構成されていたが、賛成票を投じた委員は急進党の委員11名と民主党の委員11名、スロヴェニア農業者党の委員1名であり、共産党、農業者党、国民

クラブ、ユーゴスラヴィア・クラブ、ユーゴスラヴィア・ムスリム組織の各委員19名は反対票を投じた。ここでラディッチのクロアチア共和農民主党が議会に参加していたらその議席数に応じて6名の委員を得ていたので、採決の結果は逆転し、政府案は否決されていた可能性があった。その場合、政府案は廃案になり、反対勢力の提案を取り入れた憲法案が練り直されていた公算が大であった²²。研究者の中にはクロアチア共和農民主党の議会ボイコットを有効な戦術ではなかったとみる者が多い。彼らが議会に参加していれば他の反対派と連携して政府案を根本的に修正できたとの指摘があるが（たとえば、Joseph Rothschild, *East Central Europe between the Two World Wars*, University of Washington Press, Seattle and London, 1974, p.216）が、憲法委員会での採決の結果を根拠とすれば、妥当な見方だといえる。

急進党と民主党の議席は憲法制定議会の過半数に30議席近く足りなかったため、政府案を議会を通すためには他の政党の協力がどうしても必要であった。彼らが目をつけたのは、政体や国家制度以外の面で交渉の余地があった農業者党（39議席）とユーゴスラヴィア・ムスリム組織（24議席）であった。しかし、パシッチ政府は、土地改革の方針をめぐって折り合いがつかず、農業者党とは交渉を打ち切った。それでも政府は農業者党からスロヴェニア人のグループ（スロヴェニア農業者党）を離反させ、政府の協力者にすることに成功した²³。ユーゴスラヴィア・ムスリム組織は当初はクロアチア人やスロヴェニア人の政党と共同行動をとる方針であったが、急進党の働きかけにより態度を変えた。彼らは、行政単位を設定する際にボスニア・ヘルツェゴヴィナの一体性を維持すること、宗教的・教育的自治の保証、イスラム教徒地主の土地を土地改革の対象から外すこと、旧封建領主の土地収用に対する補償金の支払い、サラエヴォ地方政府へのムスリム人の参加などを見返りの条件として獲得し、政府の憲法案を支持することにした²⁴。このほか政府は、南セルビアのイスラム教徒の政治代表であるジェミイット党と交渉し、行政単位の設定以外の点でユーゴスラ

ヴィア・ムスリム組織に与えたものと同様の保証を与えることにより、彼らの支持を取り付けようとした²⁵。

しかし、政府は、中央集権主義に反対し、地方政府の自治権の復活を求めるクロアチア人政党やスロヴェニア人政党に対しては、いっさい譲歩を示さなかった。このため、5月12日、クロアチア同盟を中心に構成される国民クラブの議員は、政府はクロアチア人代表の意見を無視し、多数決で憲法を強制しようとしていると述べ、これに抗議の意思を示すために今後の審議に参加しないことを表明した²⁶。次いで6月11日、懲罰動議をたびたび出され、議会での発言を封じられていた共産党の議員団が議会のボイコットを表明した²⁷。6月15日にはスロヴェニア人民党を中心に構成されるユーゴスラヴィア・クラブの議員も、政府が協議に応じないことを理由に、憲法草案の審議と採決の欠席を表明した²⁸。この結果、最初から議会に姿を見せなかったクロアチア共和農民党とクロアチア権利党の議員と合わせて、148人の議員が憲法の採決に参加しないことになった。

政府案が採択されるためには議会定数の過半数210の賛成票が必要であったが、投票直前の民主党と急進党の議席は176であった。政府は、ユーゴスラヴィア・ムスリム組織の協力を確保していたはずだが、直前になって土地改革や憲法の規定をめぐる政府との間に見解の相違が表面化し、ユーゴスラヴィア・ムスリム組織は政府案に対する支持を一時保留にする事態が発生した²⁹。また民主党内に抵抗勢力があったため、政府とジェミット党との交渉は難航し、合意が成立していなかった。このため、憲法案の採決の日が間近に迫っても、過半数の支持票の確保は不透明なままであった。しかし、老獪なパシッチは、イスラム教徒地主に不利な土地政策を主張する農業党との交渉をおこなうことで、ユーゴスラヴィア・ムスリム組織の党幹部を最終的に譲歩させ、政府案に対する支持を改めて表明させた。ジェミット党とは採決の前日に協定を成立させた³⁰。

1921年6月28日に実施された憲法制定議会での投票の結果は、賛成223、反対35、欠席158であり、政府案はかろうじて過半数の賛成を得て採択され

た。この日は、正教徒の暦では聖人ヴィトゥスを祝う日（ヴィードヴダン）であったので、南スラヴ人王国の最初の憲法はヴィードヴダン憲法と呼ばれた。

3 クロアチア・ブロック形成の波紋

ヴィードヴダン憲法の制定によって政府がこれまで築き上げてきた中央集権的な君主制国家の枠組みは法的に基礎づけられた。しかし、これによって南スラヴ人王国の政情は安定に向かったかといえ、そうではなかった。政府が憲法の採択を強行したことに反対勢力は議会外で大きな抗議の意思を示したからである。

一つは共産党員の反発である。1919年に隣国ハンガリーで共産党が革命政府を一時樹立した事件があり、南スラヴ人王国政府は当初から共産主義者の活動に警戒を強めていた。しかし、1919年4月に結成されたユーゴスラヴィア社会主義労働者党（翌年ユーゴスラヴィア共産党に改称）は労働組合の組織化を通じてしだいに支持基盤を拡大していた。しかも、共産党は憲法制定議会選挙で58議席を獲得して国政の表舞台に登場し、憲法制定議会では政府批判の急先鋒となったため、政府の警戒はいっそう強まった。1920年の年末にはボスニア地方の各地で鉱山労働者がストライキを起こし、一部では官憲の部隊と衝突する事態が発生したが、政府はこれを口実に12月30日、「オブズナーナ」と呼ばれる政令を公布し、労働組合運動への関与を始め共産主義者のあらゆる活動を禁止した。共産党の日常的な活動はこれによって大きな制限を受けたが、共産党の議員団は議会での活動を継続した。

だが、共産党の議会活動は与党側の妨害によって行き詰まったため、議会主義に疑問を抱いた一部の党員はテロによる報復を計画した。憲法が採択された翌日の1921年6月29日、一人の党員が摂政アレクサンダルと国会議長の乗った馬車に爆弾を投げつける事件を起こした。爆弾は通りにそれ

て爆発し、アレクサンダルらは無事であったが、翌月の7月21日、別のグループがオブズナーナの提案者である内相のミロラド・ドラシュコヴィッチを保養先で射殺した。いずれの事件も犯人はすぐに逮捕され、事件への関与を疑われた共産党の幹部も検察に訴追された³¹。8月3日、これらの事件を口実に政府はオブズナーナよりも強力な治安維持の法律である「国家保安法」³²を議会で成立させ、共産党の存在そのものを非合法とした。このあと政府の主導により議会は共産党議員の議員資格を無効にする決定をおこない、すべての共産党議員を議会から追放した。

もう一つはクロアチアの野党勢力の結束である。クロアチアに根拠を置き、憲法制定議会選挙で議席を得た政党は、クロアチア同盟、クロアチア共和農民党、クロアチア権利党の三党であった。このうち、クロアチア共和農民党とクロアチア権利党は憲法制定議会をボイコットしたが、クロアチア同盟はボスニア・ヘルツェゴヴィナのクロアチア人政党であるクロアチア農夫党と合同会派（国民クラブ）を結成して、憲法制定議会の審議に参加した。クロアチア同盟は、第一次世界大戦以前から活動していたクロアチアの有力政党スタルチェヴィッチ権利党に対して進歩民主党などのクロアチア人政党が1919年7月に合流して結成した政党である。彼らは、1919年から1920年に開かれた臨時国民議会では当初40議席をもち、クロアチア人を代表する政党として、南スラヴ人王国政府にたびたび閣僚を出していた。もともと彼らは、スヴェトザール・プリビーチェヴィッチらのグループ（「クロアチア人・セルビア人連合」）と共に旧オーストリア＝ハンガリー領から独立した南スラヴ人国家とセルビア王国との国家統合を積極的に推進したグループであった。1918年12月1日の国家統合のセレモニーでは、その代表（スタルチェヴィッチ権利党党首のアンテ・パヴェリッチ）は旧オーストリア＝ハンガリー領の南スラヴ人を代表してセルビア国王に国家統合を求める上奏文を読み上げた。憲法制定議会では、彼らは君主制を容認する立場に立ち、共和制を求めるクロアチア共和農民党およびクロアチア権利党とは一線を画していた。その代わりに、彼らは連邦制に近い

国家制度を主張し、クロアチア地方政府とその自治権の復活を要求した。しかし、政府はまったく彼らとの交渉に応じようとはしなかったため、これに憤慨したクロアチア同盟の議員は議会をボイコットし、ベオグラードを引き上げた。ザグレブに戻った彼らは戦術を転換し、ラディッチらとの共闘を始めたのである。

1921年5月21日、クロアチア共和農民党、クロアチア権利党、クロアチア同盟の三党は、「クロアチア人へのメッセージ」という名の文書を発表した。三党から選出された国会議員のすべてがこの文書に署名したが、これが後に「クロアチア・ブロック」と呼ばれた三党の統一行動の始まりであった。「メッセージ」は旧オーストリア＝ハンガリー領からのクロアチアの独立を宣言した1918年10月28日のクロアチア議会の決議を遵守し、クロアチア国家の独自性とクロアチアの文化、経済、社会的遺産を擁護することを求めた。「メッセージ」はまた、クロアチア人の意思に反する憲法を押しつけようとしているとベオグラード政府を非難し、クロアチアの代表が参加していない議会には憲法制定の権限を認めることができないと主張した。そのうえで、ベオグラード政府の中央集権主義に対抗するために、すべてのクロアチアの勢力を結集することが必要性だと「メッセージ」は説いた³³。クロアチアの野党勢力はその後も結びつきを強め、1921年8月初めにはクロアチア・ブロックを共闘組織として正式に発足させた。その幹部会議には三党から二人ずつメンバーを出し、執行部には各党を代表してステパン・ラディッチ（クロアチア共和農民党）、マテ・ドリンコヴィッチ（クロアチア同盟）、ミルコ・コシュティッチ（クロアチア権利党）が選ばれた。しかし、当然のごとく主導権を握ったのは最大勢力を代表するラディッチである。

クロアチア・ブロックは、クロアチアの国権と独自性の承認を求める点では一致していたが、これをどのような戦術で実現するかについては三党間には見解の相違があった。クロアチアの国家主権をもっともラジカルに主張するクロアチア権利党は、クロアチア問題は内政上の問題ではなく、

国際問題であり、国家間代表による交渉によって解決されなければならないという立場に立っていた。これに対して、もともと不本意に議会をボイコットしたクロアチア同盟は、クロアチア問題を内政上の問題としてとらえ、ベオグラードの政権と協定を締結することによってこれを解決し、早期に議会に復帰したいと考えていた。最大勢力のクロアチア共和農民党の戦術的振幅があり、しばしばクロアチア問題を国際社会に訴えて、ベオグラード政府に影響力の行使を求めようとした。その一方で、彼らはクロアチアの民族的要求をユーゴスラヴィア国家の枠組み内で解決することを求め、議会のボイコットを続けながらも、ベオグラード政府との交渉の機会をうかがっていた。

クロアチアの野党勢力の結束は、ベオグラードの与党勢力、つまり急進黨と民主党の関係に波紋を投げかけた。もともと急進黨と民主党は共に主としてセルビア人の居住地域を地盤とし、選挙に際してはセルビア人有権者の票を奪い合うライバル政党であり、前に述べたように臨時国民議会では激しい政権抗争が発生した。彼らは、野党勢力との対抗上、憲法制定議会では憲法を採択するために表立った対立を控え、協力関係を維持してきた。しかし、憲法は首尾よく制定されたため、しだいに元の関係に戻ろうとする力が働き始めた。国家保護法の制定と議員資格の剥奪により、共通の政敵であった共産党に壊滅的な打撃を与えることができたこともこの力の働きを促すことになった。

最初に表立った行動を起こしたのは、党首のニコラ・パシッチと対立して急進黨幹部の中で孤立していたストヤン・プロティッチである。プロティッチは南スラヴ人王国政府の初代と三代の首相であった。初代首相在任時、プロティッチは旧オーストリア＝ハンガリー領諸地域の統治政策をめぐって中央集権制の緩和を主張し、厳格な中央集権主義を維持しようとする民主党の指導者プリビーチェヴィッチと衝突した。この経歴が示すように彼は、ユーゴスラヴィアの複雑な民族問題を考慮して、地方政府と自治権の復活を求めるクロアチア人の要求に早くから一定の理解を示してい

たことで知られる人物であった。プロティッチは、単一の国家制度を維持しながらも、歴史的な地域区分を尊重した行政区分をおこない、地方政府と議会には一定範囲の権限を移譲すべきだという立場に立ち、憲法の審議の過程では独自の憲法案を憲法委員会に提出していた。したがって、現行の憲法を支持していなかったプロティッチは、「憲法修正」をテーマにラディッチを中心とするクロアチア人反対勢力と協定を結び、彼らを急進党の陣営に取り込むことができないかと考えたのである。この方針は、中央集権主義の頑強な擁護者であるプリビーチュヴィッチらの民主党を政権から排除することを当然の帰結としていた。急進党党首のパシッチは、自ら提案したヴィードヴダン憲法をただちに修正する気はなかったが、クロアチア・ブロックとの連携の可能性をちらつかせることはライバル政党の民主党に揺さぶりをかけ、急進党の政治的立場を強化するという判断から、他の幹部と共にプロティッチの行動を容認する方針をとった³⁴。

ラディッチとプロティッチの会談は、1921年8月10日にクロアチアの保養地リムスカ・トプリツァでおこなわれた。1918年12月1日の統一国家の成立後、ラディッチがセルビア王国の政治指導者と接触するのはこれが最初であった³⁵。プロティッチはまず、急進党と党首のパシッチはけっして反クロアチア人の方針をとっていないと切り出した。これはこれまで政府がとってきた対クロアチア政策の責任は民主党にあることを暗に示唆していた。プロティッチは話し合いを続けて合意をめざすことが必要だと述べ、急進党はラディッチらと交渉の意思があることを示した。話題は国家制度の再編に転じ、ラディッチは、南スラヴ人は民族的・地理的・社会的見地からは一つの国民（ナロード）であるが、文化的・歴史の見地からは、スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人、ブルガリア人から構成されるという持論を披露し、このような地域では中央集権主義は適さないと述べた。プロティッチはブルガリア人が南スラヴ人に含まれることには賛成しなかったが、厳格な中央集権主義は南スラヴ人の国家にふさわしくないことには同意した³⁶。二人はこのあと場所を変えて二度会談した。ラ

ディッチは、これらの会談を通して、クロアチア人は政治的な独自性の獲得のために最後まで闘争を続けると主張したが、同時にクロアチア人は公正な協定をセルビア人と結ぶ用意はあると述べることも忘れなかった。

プロティッチとラディッチの会談は具体的な成果に結びつかなかったが、民主党の内部に大きな影響を与えた。民主党は、リュバ・ダヴィドヴィッチを中心とする旧セルビア王国の野党勢力と、旧オーストリア＝ハンガリー領のセルビア人政治指導者プリビーチェヴィッチが率いるグループとが1919年に合体して結成された政党であった。プリビーチェヴィッチはきわめて原則的な統合的ユーゴスラヴィア主義者であり、その理念を中央集権主義的な国家制度によって実現する政治基盤をつくるために民主党を結成したが、ダヴィドヴィッチ・グループはライバル政党の急進党に対抗し、政権を獲得することを最大の動機として民主党に合流した。彼らにとっては、中央集権制は絶対的な手段ではなく、急進党に対抗して政治的影響力を強化するためには、中央集権制の緩和や憲法の修正をおこなって、クロアチアの野党勢力と連携することも選択肢の一つであった。したがって、急進党のプロティッチが民主党を出し抜いてラディッチと接触したことはダヴィドヴィッチ派を刺激し、対抗策に向かわせた。1919年9月、今度はダヴィドヴィッチが側近のミラン・グロルをザグレブに派遣した。グロルはただちにラディッチと会談し、クロアチア・ブロックの議会参加の可能性を打診した。ダヴィドヴィッチは何らかの方法で急進党のもくろみをくじき、来るべき政局の主導権を握ろうと考えたのである。もともと、ラディッチとの話し合いは進展しなかったが、ダヴィドヴィッチはプリビーチェヴィッチの了承もなくザグレブに使者を派遣したため、あとでプリビーチェヴィッチの猛烈な反発を招くことになった³⁷。

プリビーチェヴィッチにとって、成立したばかりの憲法を修正することは民主党の路線転換を意味し、論外の政策であった。民主党は1921年10月30日と31日、最初の党大会を開いたが、そこでの主要な演説者はプリビーチェヴィッチであった。民主党は国家と国民の統一性を確保するために結

成された政党であり、憲法の修正は国家の遠心力を強め、結果的に単一国家を三つの国家（セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人の国家）に分解してしまう。このように述べて、プリビーチェヴィッチは憲法修正に断固として反対を表明した。党大会はプリビーチェヴィッチの見方に賛同し、「民主党はヴィードヴダン憲法の徹底的な実施を擁護し、所定の法律の制定によってこれが日常生活に完全に根付くまでは憲法の修正ないし変更には同意しない」という決議を採択した³⁸。党大会の直後の11月初め、内相の地位にあったプリビーチェヴィッチは、ヴィードヴダン憲法に沿って国土を33の行政単位に分割する法案を発表した。プリビーチェヴィッチはこの法律の制定を急ごうとしたが、そこにはこれによってヴィードヴダン憲法体制を確定し、急進党がクロアチア・ブロックと交渉をおこなう余地をなくしてしまおうという意図があった³⁹。

プリビーチェヴィッチがヴィードヴダン憲法を頑強に擁護した背景には、南スラヴ人の単一民族的な一体性の実現という理念（統合的ユーゴスラヴィア主義）上の理由だけでなく、彼のグループ内の主要なメンバーがクロアチア出身のセルビア人で構成されていたという事情があった。クロアチアのセルビア人は、自分たちにとって唯一好都合な国家は、準国家的な地域権力の存在を認めない中央集権的な単一民族国家だと考えていた。というのは、ユーゴスラヴィア全体ではセルビア人は多数派の支配民族であるが、ラディッチらクロアチア人反対勢力が要求する連邦制的な国家制度が実現すると、クロアチアのセルビア人はこの地域における少数民族として孤立してしまう。その場合には、多数派のクロアチア人がセルビア人の既得権を引き続き認めるかは不透明となる。それゆえ、彼らは、南スラヴ人を単一民族とみなしてクロアチア人問題の存在自体を否定し、中央集権的な単一国家の維持を執拗に支持したのである。

これに対して、ダヴィドヴィッチ派のメンバーは、旧セルビア王国の野党勢力（独立急進党、進歩党、国民党）出身者であった。彼らは、選挙に際しては、旧オーストリア＝ハンガリー領を地盤とするプリビーチェ

ヴィッチ派のメンバーとは異なって、より多くの選挙区で急進党議員と地盤が競合していた。したがって、彼らは、民主党の党綱領の実現よりも、ライバル政党である急進党の打倒を第一に考えなければ自らの政治的地位を維持できない状況に置かれていた。もともと彼らは政治的影響力の拡大のために、セルビアの外部の政党との連携を必要とした。彼らが旧オーストリア＝ハンガリー領のプリビーチェヴィッチ・グループを中核とする民主党に合流したのはそうした理由からであった。しかし、プリビーチェヴィッチ派が中央集権主義の維持のために急進党への接近を深めるにつれて、ダヴィドヴィッチ派は別の政治勢力との連携が必要となってきた。民主党の路線をめぐる派閥対立は、このような両者の支持基盤の相違に根ざしていた⁴⁰。

ライバル政党の急進党は民主党の弱点を見抜いており、党内基盤の弱体化をねらって民主党にしばしば揺さぶりを仕掛けた。ストヤン・プロティッチは、1921年9月、プリビーチェヴィッチの不祥事を機関誌に暴露して道義的責任を問うた。それは、内相ドラシュコヴィッチの暗殺を幫助したルドルフ・ヘルツィゴニャという男に対して、民主党指導者のプリビーチェヴィッチが内相を務めていた1919年に4万クロナの金銭を与えていたというものであった⁴¹。さらに急進党は官憲の統率権を始め重要な権限をもつ内相のポストを民主党から取り戻そうとして画策した。12月3日、いったん辞表を提出して内閣を総辞職させたパシッチは、再び首班指名を受けて民主党と組閣交渉に入った。急進党は内相のポストの獲得をねらったが、民主党はその見返りとして急進党が受け入れがたい要求を突きつけて⁴²、内相のポストを譲ることを拒否した。ただし、民主党は急進党の意向を考慮して、議員総会を開き、急進党側の不満が強かったプリビーチェヴィッチを内相からはずす決定を多数決でおこなった。投票の結果はダヴィドヴィッチ派の勝利であったが、党内にはしこりが残った。急進党は内相のポストを獲得できなかったが、民主党の内部対立を助長することには成功した。もともと、プリビーチェヴィッチは教育相の地位に就き、

依然大きな影響力を保持した⁴³。

4 政権をめぐる駆け引きの交錯

憲法の採択によって憲法制定議会はその役目を終えた。本来ならば新憲法が規定する議会を開くために総選挙が実施されるべきところであるが、1921年7月、憲法制定議会は勅令によって通常の国民議会に衣替えをした。ただし、この議会の権限は前年に成立した選挙法によって大きく制限されており、憲法の規定に関連する法律と緊急を要する予算関連の法律しか議決できないことになっていた。しかも、その開催期間は最長二年と定められていた。この議会はクロアチア・ブロックの議員63名が参加せず、議員資格を剥奪された共産党議員58名の議席には補欠選挙もおこなわれていなかったため、定員の30%近い議席が欠員という異常な状態が続いていた。したがって、国政を正常におこなうために、総選挙を実施して新しく議員を選出し、憲法が定める議会を早期に開催することが必要であった。だが、そのため、急進党と民主党は、選挙をにらんだ駆け引きをしないで活発化させることになった。

旧セルビア王国の政党、すなわち、急進党と民主党ダヴィドヴィッチ派はそれぞれ、来るべき選挙を有利に闘うために、クロアチアの野党勢力を自陣営の味方につけることをねらった。急進党は、1921年12月に開いた地方代表者会議でクロアチア問題について特別の決議を採択し、クロアチア人の要求に理解を示して、地方分権を拡大する用意があることを明らかにした。その上で、この決議は、国家と国民の一体化を前提にクロアチア人に対して話し合いのテーブルに就くことを暗に求めた⁴⁴。民主党内では、内相のヴォヤ・マリコヴィッチがプリビーチェヴィッチと党の総務会で衝突した。彼は、プリビーチェヴィッチの存在を党勢拡大の最大の障害だと述べ、急進党のプロティッチが暴露したヘルツィゴニャ事件を蒸し返してプリビーチェヴィッチに閣僚辞任を求めた⁴⁵。

これに対して、クロアチアのセルビア人を主要な支持基盤とするプリビーチェヴィッチ派はこれまでどおり官憲の力を利用して、クロアチアの野党勢力の運動を強権的に抑え込むことに注力した。プリビーチェヴィッチの意向を受けて、クロアチアの行政当局は野党の機関誌の発行や政治集会の実施を禁止し、異議を唱える者を容赦なく逮捕した。「ラディッチ万歳」と叫んだだけで20日間の禁固刑を受けるほどであった。プリビーチェヴィッチ派の機関誌は、クロアチアではいまにも革命が起きそうな雰囲気があることを連日のように伝えて世論の危機感をあおった⁴⁶。

クロアチアのラディッチは相対的に優位な立場にあったが、足下をすくわれるような事件が起こった。1922年1月、クロアチア・ブロックは、イギリスのイニシアチブによりイタリアのジェノヴァで開かれることになっていた国際会議に向けて呼びかけを計画していたが、その「覚え書き」が準備段階で漏れて、2月8日、ベオグラードの日報『ポリチカ』に掲載されたのである。この「覚え書き」はクロアチアの国権に立って現行の国家の成立と統治構造の不当性を説き、クロアチア国家の主権回復と南スラヴ人国家の国家制度の再編に支持を求めるものであった⁴⁷。しかし、それはクロアチアの歴史と社会を西欧文明に属するものとして自慢し、これに対して随所にセルビアの政治的伝統について西欧的理念をもたない野蛮なものとしてこきおろす記述を含み、また国際社会にベオグラード政府に対する圧力の行使を暗に求めていたので、セルビア人を大いに怒らせた。それだけでなく、この「覚え書き」は、プリビーチェヴィッチ派に反クロアチア・ブロックのキャンペーンを強化する絶好の口実を与えた。

パシッチ政府は、ヴィードヴダン憲法を実施に移すために当時の内相プリビーチェヴィッチが公表した行政区法を店ざらしにしていた。その理由はクロアチア・ブロックとの交渉カードを温存しておきたいという思惑があったからであるが、ここにいたってこの法律を成立させる方針を固めた。これに抗議してユーゴスラヴィア・ムスリム組織の二名の閣僚が辞任したが、パシッチは同党から賛同者を一本釣りして入閣させ閣議を成立させ

た上で、1922年4月26日、これに署名した⁴⁸。この法律に従えば、これまでの歴史的な地域区分は完全に否定されて、国土は33の行政区（州）に分割され、中央政府の厳しい統制下に置かれることになる。クロアチア・ブロックは、5月15日、このような国土の分割に強く抗議した。クロアチアでは政府と民衆の間には小競り合いが幾度か発生した。ところが、奇妙なことに、行政区法は成立したものの、この法律に沿って国土の行政的分割がただちに実行されたわけではなかった。その即時実施を求めたのは政府・与党内では民主党プリビーチェヴィッチ派だけであった。急進党も民主党ダヴィドヴィッチ派もこの法律の実施を先延ばしにすることで、クロアチア・ブロックとの交渉の余地を残そうと考えていたのである⁴⁹。

ところで、民主党のダヴィドヴィッチは急進党やプリビーチェヴィッチ派との対抗上、クロアチア・ブロック以外の勢力との連携をも考えていた。クロアチア・ブロックの中核であるクロアチア共和農民党は農村部のクロアチア人の絶大な支持を得ていたが、都市部のクロアチア人の中には彼らの主張に与しないグループもあった。その一つは、ヨシプ・スモドラカとミラン・チュルチンを中心とし、『新しいヨーロッパ』という雑誌に寄稿していたダルマチア地方の知識人グループであった。もう一つは、『自由のトリビューン（擁護者）』という雑誌に寄稿していたザグレブの知識人グループである。後者は第一次世界大戦中に南スラヴ人統一国家の形成を求めて活動したユーゴスラヴィア委員会のメンバーが中心になっていたが、アンテ・パヴェリッチ（スタルチェヴィッチ権利党の元党首で国民評議会副議長）のような旧世代の政治指導者もこれに加わっていた。彼らは、現在の政権には批判的であるが、クロアチア・ブロックの綱領や闘争戦術にも反対の立場をとり、国家制度の点では連邦制を求めず単一国家制度を支持するが、広範な地方分権の確立を求める立場をとっていた。このような傾向から彼らは「中道路線グループ」と呼ばれた。彼らは、「ユーゴスラヴィア独立社会政治クラブ」という名のもとに1922年初めから政治的活動を活発にし、同じような考え方をもちた知識人を組織化しようと計画していた。

彼らの主張は民主党のダヴィドヴィッチ派の志向と共鳴するものがあつた。それゆえ、ダヴィドヴィッチ派はこれらのグループとの連携を確立しようとし、1922年4月にはダヴィドヴィッチ自らがザグレブを訪問して、バヴェリッチら『自由のトリビューン』派の知識人と会談をおこなつた⁵⁰。

クロアチアの知識人グループと同じような政治的志向をもつた知識人グループはボスニアにも存在した。それは『ナロード』という雑誌を主催していた知識人であり、その中心はニコラ・ストヤノヴィッチやドゥシヤン・ワシリエヴィッチであり、かつてユーゴスラヴィア委員会の運動に参加していたセルビア人であつた。彼らは、セルビアの著名な雑誌『セルビア文学雑誌』編集部と共催で、1922年6月28日と29日、ボスニアの首都サラエヴォ近郊のイリジャで知識人の合同会議を開いた。この会議にはクロアチア、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ、セルビアの各地から23名のセルビア人とクロアチア人が参加した。会議の参加者は、民族的な構成ではセルビア人の方が多かつたが、政党所属では民主党の黨員または元黨員が多数を占めた。いずれもプリビーチェヴィッチの中央集権主義政策に批判的な人びとである⁵¹。

会議の参加者は、「セルビア人とクロアチア人の関係改善」をテーマに自由に意見を述べ、国家の現状について次のような決議を採択した。1. 現在の国民の不満と国家の困難の主要な原因は、行政機構の欠陥に加えて、政府とクロアチアの主要な野党勢力がとっている両極端な対決姿勢にある。2. 政党のアジテーションによって民族間の不信と敵対感情が助長されているとしても、国民の連帯と国家の統一の求める生き生きした感情は国民の間に存在する。3. 政府とクロアチアの野党勢力はお互いに協定の成立と国家の安定を困難にしている。4. 国土の行政的分割を強行することは協定の成立を困難にする。5. 地方分権を拡大する方向で憲法を修正することは、民族間の不信を取り除き、行政機構を改善し、平等の感覚を広め、それによって南スラヴ人としての共通意識および国家の統一性に対する意識を発展させることになる⁵²。最後に会議の参加者は、セルビア人

とクロアチア人の協定締結に向けて和解的雰囲気が高めるため、9月10日にクロアチアの首都ザグレブでもっと多くの知識人を集めた大会を開くことを決めた。

このあと9月のザグレブ大会に向けてただちに実行委員会が立ち上げられた。その長にはヨシプ・スモドラカが就任したが、主導権を握ったのはプリビーチェヴィッチの政策に異論と不満をもつ民主党のダヴィドヴィッチ派のメンバーである。彼らの一部は、この運動を契機にユーゴスラヴィア的な志向をもったセルビア人とクロアチア人の市民政당을結成することをもくろんでいた。その構想によれば、この政당은、クロアチア・ブロックと政府の政治姿勢に反対する同志によって結成され、地方分権の拡大の方向で憲法を修正することにより、民族間の対立と緊張を緩和するとされた⁵³。会議の準備段階では、このほかにも様々な構想が浮かび上がったが、いずれにせよダヴィドヴィッチ派のメンバーの共通の目標は、この会議をきっかけに政府とクロアチア・ブロックの双方の政策に反対する勢力との合従連衡を実現し、急進党と民主党の連立に代わる新しい政治勢力の組み合わせを形成することにあった。その際、当面の働きかけの対象は「中道路線」をとるクロアチア人の知識人グループであったが、その一方で実行委員会の一部は、将来の政당再編をにらんで、クロアチア・ブロック内部でラディッチの戦術に不満をもつクロアチア同盟のメンバーや急進党反主流派のストヤン・プロティッチとも非公式な接触をとっていた⁵⁴。

この大会の最大の目玉は、党首のダヴィドヴィッチ始め民主党から多数のメンバーが参加を予定していたことであった。しかし、ダヴィドヴィッチ派の大会参加は、当然のことながら、プリビーチェヴィッチ派の大きな反発を招いた。大会の直前の1922年9月6日、党総務会で両派は衝突した。プリビーチェヴィッチは、大会の主催者は憲法修正の立場に立ち、また民主党の政策に反対する新党の結成をもくろんでいることを指摘して、ダヴィドヴィッチの大会への参加に強く反対した。彼によれば、大会に参加し、政府に不満をもつ者と談合することは、民主党のこれまでの政策の否

定を意味する。プリビーチェヴィッチは、もしダヴィドヴィッチとその他の党員が大会に参加するならば、自分は政府と党総務会に辞表を提出するとまで述べた⁵⁵。これに対して、ダヴィドヴィッチは、大会参加の理由を次のように釈明した。この大会は何よりもセルビア人とクロアチア人が互いに歩み寄りを深め、クロアチア・ブロックのような民族主義ブロックの運動を粉砕することを目的としている。大会の主権者からは、大会の決議には憲法修正には言及しないと言質を得ている。それに自分たちは個人の資格で大会に参加するのであって、党を代表して大会に参加するのではない。この機会に様々な政党の代表と話し合うことは、連立政権の内部で急進党に対する民主党の地位を強化することにもなる。ダヴィドヴィッチはこのように述べて大会参加を正当化した⁵⁶。

両派の議論の応酬は二日間続けられたが、会議は何の結論も出すことができなかった。総務会のメンバーが少数しかそろっていないということで、プリビーチェヴィッチが改めてメンバーを招集して議論をおこなうことを提案し、了承されたためである。しかし、このあとプリビーチェヴィッチおよび民主党の閣僚は、党総務会と議員クラブが決定を下すまで閣僚の仕事はできないと表明して、党総務会に進退伺いを提出した。これに対抗して、ダヴィドヴィッチも党総務会に党首の地位を辞任することを伝えた。これによって、ダヴィドヴィッチは民主党の党首としてではなく、個人の資格で大会に参加することにしたのである⁵⁷。

1922年9月10日、知識人の大会がクロアチアの中心都市ザグレブで予定どおりに举行された。開会宣言をおこなったのはアンテ・パヴェリッチ（スタルチェヴィッチ権利党の元党首）であり、大会議長を務めたのはヨシプ・スモドラカであった。大会は2000名を超すクロアチア人およびセルビア人の知識人が参加して、一大イベントとなった。民主党からはダヴィドヴィッチを始め多数の党幹部が参加し、彼らは会議で積極的に発言して大きな存在感を示した。大会は決議を採択して表向きは成功裏に終わった。しかし、6月のイリジャ会議の決議に比べると、この大会の決議の内

容ははるかに控えめであり、何よりも問題解決の手段として現行憲法の見直しを求める提案は含まれていなかった。その理由は、プリビーチェヴィッチ派の批判をかかわすためにダヴィドヴィッチが大会参加の条件として憲法の修正要求を大会決議に盛り込まないことを求め、大会の実行委員会はこの要求に沿って事前に憲法修正に言及した文章を決議のテキストから削除していたからであった⁵⁸。この結果、大会決議は政府に対する批判を直接的には述べず、クロアチア・ブロックの政策のみを反国家的な扇動として非難する点でバランスを欠くものとなった⁵⁹。

5 ダヴィドヴィッチとラディッチの交渉

民主党ダヴィドヴィッチ派は、ザグレブでの知識人大会の前から無党派のクロアチア知識人の組織化を始めていたが、他方で彼らは、クロアチア・ブロック内の穏健派であるクロアチア同盟をクロアチア・ブロックから引き離すことをねらっていた。だがこれは成功しなかった。たしかにザグレブでの知識人の大会にはクロアチア同盟所属の政治家の参加もみられた。しかし、クロアチア同盟の指導部はクロアチア・ブロックから離脱することを拒んだ。むしろ彼らは、ダヴィドヴィッチがラディッチと直接に交渉することを求めた。クロアチア同盟指導部は両者の接触を積極的に仲介し、知識人の大会の直前にはダヴィドヴィッチ側近のパヴレ・アンジェリッチがザグレブを訪れ、ラディッチと会談した。もっとも、この会談は何の成果も生まなかった⁶⁰。

ステパン・ラディッチは当初、ザグレブの知識人大会を冷淡な目で見ていた。彼は、このような運動はクロアチア人の利益にそむくことを強調し、クロアチア同盟の少なからぬメンバーがこの大会に参加したことを不愉快に思っていた。そのため、この運動を背後で操り、クロアチア同盟の引き離しを仕掛けていた民主党との交渉には積極的に気持ちになれなかったとみられる。だが、ラディッチの態度は9月下旬に突然変わった。民主

党との直接対話に応じるサインを示したのである。この知らせを受けて、ダヴィドヴィッチの使者アンジェリッチは再びザグレブに来訪し、10月5日、ラディッチを始めクロアチア・ブロックの幹部と話し合いをおこなった。

アンジェリッチは、クロアチア・ブロック幹部にダヴィドヴィッチの政局の見通しを伝えた。これに基づいて両者は協定書（プロトコル）を作成し、次の点を申し合わせた。1. 現在の政権はまもなく倒れ、総選挙が告示される。2. 選挙管理内閣にはおそらくダヴィドヴィッチが首班指名される。その場合、この内閣にはクロアチア・ブロックの同意のもとにクロアチア人の非議員3名が入閣する。3. この内閣の任務は、もっぱらクロアチア・ブロックとの協定の締結と自由選挙の実施にある。驚くべきことにラディッチはこれに加えて、10月23日に予定されているクマノヴォの戦い10周年記念式典に、クロアチア・ブロックの議員全員を参加させる意向を示した。クマノヴォの戦いとは、1912年のバルカン戦争でセルビア軍がトルコ軍に大打撃を与えたマケドニアでの戦いであり、その総指揮を執っていたのは現国王のアレクサンダルであった⁶¹。ラディッチが記念式典に来る可能性があることは翌日のベオグラードの新聞がスクープ記事として報道し、セルビアの人びとの間に大きな関心を引き起こした⁶²。しかし、上述の協定書とラディッチの記念式典への参加はまもなくペンディングになり、共にリップサービスに終わった。民主党内で路線をめぐる議論が再開されたためである。

10月10日、民主党の総務会と議員クラブは合同会議を開いた。二日間続いた会議の議題は、「ヴィードヴダン憲法を擁護するか、それとも修正するのか」であり、その結果はクロアチア・ブロックとの交渉の行方に直接的に関わっていた。プリビーチェヴィッチ派の議員は、いわゆる「クロアチア問題」に関するこれまでの党の方針を擁護し、ヴィードヴダン憲法の修正には断固として反対した。彼らは、反政府勢力と連携しようとするダヴィドヴィッチの行動を、クロアチア、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ、ス

ロヴェニアにおける党の利益を損なうものとして非難した。これに対して、ダヴィドヴィッチ派の議員は、ヴィードヴダン憲法を擁護しつつも、戦術の転換を求めた。彼らによれば、クロアチア・ブロックとの交渉は政治勢力の新たな組み合わせを可能にし、それは急進党との関係で民主党の立場を強化することになる。最大の争点はどのような決議を出すかであった。ダヴィドヴィッチ派の議員は、ヴィードヴダン憲法にもとづき、国民と国家の一体性を損なわないという条件下で、セルビア・クロアチア関係の改善のために自由な行動をおこなう権限をダヴィドヴィッチに認めることを求めた。しかし、プリビーチェヴィッチ派が用意した決議案は、何よりも党の結束を求め、憲法の修正は国民と国家の一体性を危険にさらす試みであるとして、憲法と中央集権制を断固として擁護する闘いを継続することを強調するものであった⁶³。

両派の主張は平行線をたどったが、決定的な対立にまでは発展しなかった。会議に参加した議員の間では、民主党の政治的影響力が低下することを恐れて、党の分裂を回避しようとする雰囲気は優勢であった。そのため、10月12日に採択された党決議は両派の主張を盛り込んだ妥協的な内容となった。この決議は、プリビーチェヴィッチ派の主張を取り入れて、ヴィードヴダン憲法の完全な実施を求め、あらゆる憲法修正の試みに反対するという前年の党大会で採択された決議を守ることを宣言した。他方、同じ決議は、ダヴィドヴィッチ派の主張に沿って、憲法にもとづき、国民と国家の一体性を損なわないという条件の下で、セルビア・クロアチア関係の改善のために自由に活動する権限を党首に認めていた。最後に決議は党の一致団結を確認した。会議の終わりに、9月の会議で党首のダヴィドヴィッチが提出していた辞表を党は受理しないという提案が出され、満場一致で採択された⁶⁴。

会議のあと両派の指導者は共に決議の内容に満足していた。プリビーチェヴィッチはこの決議によってザグレブの知識人大会はあらゆる意義を失ったと述べた。なぜなら、彼の理解によれば、党決議はザグレブの知識

人大会の決議とはまったく別の路線を求めているからであった⁶⁵。たしかに党決議は、ヴィードヴダン憲法の完全な実施を求め、あらゆる憲法修正の試みに反対することを述べた前年の党大会の決議を遵守することを求めていた。しかしながら、党大会の決議には「この憲法の規定を実施に移すための所定の法律が制定されない限り」という但し書きが付いていた。ここでいう所定の法律、すなわち、国土の行政的分割を規定した行政区法はこの年の4月に制定されていた。したがって、この点では党決議は、憲法修正の問題を提起させる可能性をダヴィドヴィッチに与えていた。しかも、党決議はザグレブでの知識人の大会への民主党員の参加を非難せず、国政改善のために党首が自由活動をおこなうことを認めていたので、ダヴィドヴィッチはこれまでどおりクロアチアの反政府勢力と交渉をおこなうことが可能であった⁶⁶。他方、党決議は、ヴィードヴダン憲法の遵守の点で政見を同じくするあらゆる政党と民主党は協力することができること述べており、この点では急進党との協力関係を深めるプリビーチェヴィッチ派の路線を正当化していた⁶⁷。要するに10月12日の民主党決議は、政権の座にとどまるために、連立政権のパートナーである急進党との関係を引き続き維持することを否定しない一方で、別の政治勢力との新しい組み合わせを模索することも認めるという両にらみの路線を正当化するものであった。

民主党の議論の行方を見守っていたクロアチア・ブロックにとっては、このような決議は期待はずれであり、交渉促進に弾みをつけるものではなかった。ラディッチらは、民主党の分裂と連立政権の崩壊を、ダヴィドヴィッチらとの交渉の前提と考えていたからである。10月14日、クロアチア・ブロックは中央委員会を開いた。指導部が出した声明は、民主党決議に対する不満に満ちていた。それは、民主党の決議はクロアチア・ブロックに対する従来の強権政策を変えるものでないと批判し、ダヴィドヴィッチの妥協的な態度を理由に民主党代表との話し合いを打ち切ることを強調した。ところが、声明は別の箇所、セルビアの側に協定の締結を求める

政治集団がある限り、クロアチア・ブロックは政治協定を求める路線を継続する用意があることを述べていた。クロアチア・ブロックが公式の文書でセルビアの政治集団と対話を求めたのはこれが初めてであった。交渉の打ち切りを表明したラディッチの真意は、民主党ダヴィドヴィッチ派の生ぬるい態度を批判することであり、セルビア代表との協定締結の意欲は失われていなかったのである⁶⁸。これを受けて、10月16日、ダヴィドヴィッチの使者のアンジェリッチはザグレブを訪れ、クロアチア・ブロック代表と意見交換をおこなった。両者はすぐに既定の方針を確認した⁶⁹。

1922年11月、クロアチア・ブロックと民主党ダヴィドヴィッチ派は接触の頻度を高め、交渉を加速させた。その背景には内外の情勢の変化があった。内政面では、民主党プリビーチェヴィッチ派が急進党との連携を強めていたので、ダヴィドヴィッチ派はこれに打ち勝つためにはクロアチア・ブロックの協力がより必要になった。クロアチア・ブロックとしても、反クロアチア政策の元凶であるプリビーチェヴィッチ派が優勢になることは、黙って見過ごせないできない事態であった。国際情勢では、1922年10月31日、隣国イタリアでファシストの頭目ムッソリーニが政権の座に就いた。イタリアは1920年のラパロ条約に満足しておらず、ダルマチア地方に強い領土意欲を示していたが、その脅威はムッソリーニの政権獲得によっていっそう現実的になった。したがって、クロアチア・ブロック側には、国土の保全のために、セルビア代表とすみやかに協定を締結し、イタリアに対して南スラヴ人の一致結束を演出する必要があるがあった。

11月4日、ダヴィドヴィッチ側近のミラン・グロルとリュバ・ミハイロヴィッチがザグレブを訪れた。彼らはザグレブ在住の民主党員トミスラヴ・トムリエノヴィッチの仲介でただちにラディッチと会談した。彼らの来訪の目的は、ラディッチらを説得して、クロアチア・ブロック所属の議員をベオグラードに派遣させることであった。彼らは、クロアチア・ブロックの議員が議会に来なければ政権崩壊はあり得ないと述べて、ラディッチらに決断を促した⁷⁰。ラディッチは、グロルとミハイロヴィッチ

の状況説明を聞いてベオグラードに行く決心を固めつつあったが、それでもなお重大な懸念を抱いていた。それは、クロアチア・ブロックのベオグラード来訪に対抗して、パシッチ政府が議会を解散し、総選挙を告示するのではないかということであった。国民議会は戦争傷痍者の補償に関する法律や行政職員の身分に関する法律、農民への融資に関する法律など国民生活に関わる重要な法案を審議中であった。議会が解散された場合、法案の審議は中断することになる。そうなれば、クロアチア・ブロックは、法案の成立を妨害するためだけにベオグラードに来たような印象を人びとに与えてしまう。これは選挙を控えてまずい。クロアチア・ブロックのねらいは、国家制度をめぐる交渉にセルビアの代表を引き出すことであった。したがって、たしかな展望もなく、政権打倒のためだけに欠席戦術の放棄という虎の子のカードを切ることには大きなリスクがあり、ラディッチは躊躇せざるをえなかった⁷¹。

11月6日開催のクロアチア・ブロック中央委員会は、ダヴィドヴィッチの使者からの要請を集中審議した。ラディッチはこう述べた。「国民議会への議員派遣に関しては、何よりもその前に、現在の政権が必ず崩壊し、そのあとにクロアチア問題の解決に真剣に取り組む意志のある公正な政権が必ず現れるという保証をベオグラードから取り付ける必要がある」。このような保証が得られた場合でも、ラディッチはすべての議員を一度にベオグラードに派遣するのは得策ではないと考えていた。最初の段階では63名の議員の中からクロアチア同盟の議員数名を送り、こののち10人程度のクロアチア共和農民党の議員を送り、必要に応じて増員する。最初に派遣された議員はセルビアの諸政党の代表と会談を重ね、セルビア人との協定のための受け入れ可能な条件ができたかどうかをザグレブに報告する。この報告を受けて、残りの議員全員の派遣に関する決定をおこなう。このようにラディッチは議員の派遣を慎重におこない、セルビア側の出方次第ではいつでも欠席戦術に戻る用意を崩さないでおこうとしていた⁷²。

クロアチア・ブロックの議員を議会に派遣する条件として、ラディッチ

らがベオグラードから求めようとした保証とは、憲法上大きな権限をもつ国王が政権交代に反対しないということであった。なぜなら、クロアチア・ブロックの議員が議会に参加したとしても、国王が組閣を承認しなければ彼らが望むような政権は成立しないからであった。逆にパシッチ内閣が議会を解散しようとしても国王はこれに拒否権を行使することができた。国王は最後の鍵を握る人物であった。それゆえ、クロアチア・ブロックの指導部はクロアチア人および政権交代に対する国王の意向を知ろうとしたが、ダヴィドヴィッチの使者からは確たる情報をつかめないうでいた⁷³。11月中旬、ラディッチは情報収集のためクロアチア・ブロック指導部の三人の幹部（マテ・ドリニコヴィッチ、ヨシプ・ブレダヴェツ、イワン・クリュネヴィッチ）をベオグラードに派遣した⁷⁴。11月13日から15日、クロアチア・ブロックの三人の幹部は、民主党ダヴィドヴィッチ派の幹部のほか、ストヤン・プロティッチ、農業者党および共和党の指導者と会談をおこなった⁷⁵。彼らはさらに、9月のザグレブ知識人大会に参加したセルビア人のグループ（「クロアチア人との協定を求めるセルビアの運動」）代表とも意見交換をした。こうした会談をとおして、クロアチア・ブロックの代表は、セルビアの諸代表と次の点で見解が一致したことをザグレブに報告した。それは現下の情勢はクロアチア人とセルビア人が政治同盟を結ぶことを求めており、セルビアの諸代表とクロアチア・ブロックの代表であるラディッチが参加する合同会談を近日中に開いて話し合いを継続することであった⁷⁶。

事前協議の結果、この合同会談は11月26日、地理的にみてザグレブとベオグラードの間にある都市、スラヴォンスキー・ブロードで開催されることになった。この会談でラディッチは、現在のパシッチ＝プリビーチェヴィッチ政権を打倒し、これに代えて選挙管理内閣を組織することを、ダヴィドヴィッチおよびセルビアの野党指導者と合意する予定でいた⁷⁷。ところが、会談の直前の11月24日、ダヴィドヴィッチの使者が急遽ザグレブに到来した。彼らはクロアチア・ブロック指導部にこう要請した。クロア

チア・ブロックは事前に何の協定を結ぶことなくベオグラードに来ることにしてほしい。そうでなければ、ダヴィドヴィッチは決起できない状況に追い込まれてしまう。憲法修正は可能であるが、時間をおいてから話題にしたい。それは今回の話し合いの正式な案件にはしてはならない。さらにダヴィドヴィッチから別の伝言が届いた。それは今回の会談では現在の政権の打倒を話し合うことはできないことを告げていた。他方、ストヤン・プロティッチは、会議をザグレブかベオグラードで開催すること、参加者は政党の指導者だけに限定することを提案し、自らはスラヴォンスキー・ブロード会議の出席を断った。ラディッチは、このようなセルビアの政治指導者の提案を承伏できなかった。彼はクロアチア共和農民党の拡大幹部会議を招集して、セルビア代表との会談をご破算にすることを決定した⁷⁸。

しかし、ラディッチはなおセルビア側との交渉の継続を欲していた。11月26日、クロアチア・ブロック指導部は、「クロアチア問題を議会主義的方法で解決するための前提条件」を発表し、二つの条件を示した。一つは、セルビア側の交渉相手として、ヴィードヴダン憲法をいち早く批判してきたストヤン・プロティッチを筆頭に、最近数ヶ月現行の政権を公に批判しているセルビア人代表ならびにクロアチア人との協定を支持しているセルビア世論のあらゆる代表が参加することを求めた。もう一つは、彼らが、現在の政権を打倒し、クロアチア人との協定をおこなうための国民的な内閣を形成することで一致することを求めた。この内閣は、選挙管理内閣として、すみやかに選挙を告示し、自由選挙の準備のために、とりわけクロアチア、ダルマチア、ボスニアにおいて、行政機構を法律に基づいて改革し、強権的で腐敗した分子を権力から排除することとする。ラディッチが表向きプロティッチを交渉の相手として立てたのは、民主党党首のダヴィドヴィッチはその立場上、非公式に交渉をおこなっていることを配慮してのことであった。ラディッチが主要な交渉相手としたいのはやはりダヴィドヴィッチであった⁷⁹。ラディッチは同日、ダヴィドヴィッチに宛てて手紙を書き、真意を説明した。その中で、ラディッチは、ダヴィドヴィッチ

との交渉を望み、彼が決起すれば協定締結のためにベオグラードに出かけていってもよいとさえ述べた⁸⁰。

11月29日付けの返信でダヴィドヴィッチはこう告げた。クロアチア・ブロックが主張する前提条件はすべて原則的に承認する。その上で、これらの条件についてもっと議論をしてよい。しかし、いま何よりも必要なのは、クロアチア・ブロックの議員が議会に姿を現し、新しい政局の流れを創り出し、政権を崩壊に追い込むことである。必要なのは相互の信頼である。これはいかなる協定書よりも確実な保証となる。クロアチア・ブロックが議会に参加し、政党勢力の新しい組み合わせが可能にならなければ、民主党を分裂させることができない。さらにダヴィドヴィッチの使者は口頭で彼の要請を伝えた。12月2日にはクロアチア・ブロックは議会に来てもらいたい。そうしないと時宜を失ってしまう。クロアチア・ブロックがいつまでも議会の欠席を続けていると、プリビーチェヴィッチ派は力を増し、現在の連立政権はそれだけ基盤を固めてしまう⁸¹。

11月30日のクロアチア・ブロック中央委員会の席上、ラディッチはダヴィドヴィッチの返信を読み上げ、メンバーの意見を問うた。かねてから議会への復帰を望んでいたクロアチア同盟幹部のマテ・ドリニコヴィッチは、クロアチア・ブロックが提示した条件を承認するとダヴィドヴィッチが述べている点を評価し、ベオグラード行きに前向きな態度を示した。しかし、中央委員会のメンバーの大半は、ダヴィドヴィッチの手紙での求めに応じていきなりベオグラードに行くことには消極的であった。最高指導者のラディッチも大いに迷い、即座に決定できない様子であったという。クロアチア・ブロックが提示した条件をダヴィドヴィッチが受け入れ、協定を結ぶ用意を示していることをラディッチも評価していた。しかし、ラディッチは、セルビアの政治指導者と一度も会談を開くことなく、クロアチア・ブロックの議員をベオグラードに派遣することに不安を抱いていた。ダヴィドヴィッチの手紙の文面からは、クロアチア・ブロックが提示した前提条件を実行する手順と方法で共通の立場に立てるかどうかが不明

であったからである。結局、12月1日、ラディッチはダヴィドヴィッチの要請を丁重に断る手紙を書いた⁸²。

12月3日、クロアチア・ブロックを代表してドリニコヴィッチ（クロアチア同盟幹部）がラディッチの返信をベオグラードに持って行った。彼は、ダヴィドヴィッチ、プロティッチ、その他の野党指導者と面会し、事情を説明した。民主党ダヴィドヴィッチ派のメンバーは、なぜクロアチア・ブロックがこれほど慎重な態度をとるのか理解できなかった⁸³。しかし、ラディッチはあくまで冒険を犯す気はなかった。彼は、現在の政権が崩壊し、これに代わってクロアチア問題の解決に真剣に取り組む政権が現れるという確証を得るまでは議会の欠席を続けることを考えていた。12月2日開催のクロアチア・ブロック指導部の会議でラディッチは、「すべて事前に話し合いが付かない限り、ベオグラードに行くことはできない」という立場を強調した。クロアチア・ブロックは、なんといっても、欠席戦術をとることによってクロアチア人民衆から大きな支持を獲得していた。連立政権を構成している急進党と民主党は対立が深まり、クロアチア・ブロックは相対的に有利な政治的立場にあった。このような状況下で、うかつに欠席戦術を放棄してベオグラードの議会に参加し、期待した成果が得られない結果になることをラディッチは何よりも恐れた。いずれにせよ、クロアチア共和農民党は新興政党であり、拙速な戦術によってせっかく獲得したクロアチア人民衆の支持を失うことになることは避けたかった。次の国政選挙は間近に迫っていたからである。

6 急進党－民主党連立政権の崩壊

政権打倒のために民主党ダヴィドヴィッチ派がクロアチア・ブロックと交渉をおこなっていることは、急進党にとっては不愉快極まりないことであった。しかしながら、これによって民主党内の路線対立が深刻化し、政党としての統率力が弱まっていることは歓迎すべきことであった。それゆ

え、急進党は、ライバル政党の内部対立をもっと深めようとした。中央集権制システムを守るために強権的政策を継続しようとする民主党プリビーチェヴィッチ派は、ダヴィドヴィッチ派との対抗上、急進党との連携を深めざるをえない立場にあった。パシッチら急進党指導部は、この機会にプリビーチェヴィッチ派を急進党により強固に取り込んで民主党を分裂に追い込もうとした。その意図がはっきりと現れたのは国民議会議長選挙であった。

10月20日、国民議会の新会期の開会に際し、議長の改選が予定されていた。急進党と民主党の連立協定によれば、首相ポストは急進党が獲得する代わりに国民議会の議長は民主党から出すことになっていた。国民議会の議長は、この国の慣例により、内閣が辞職した際に後継の首相を国王に推薦する重要なポストである。

現職の議長はクロアチア人議員のイワン・リバルであった。しかし、急進党の議員クラブはリバルの再選に強く反対した。リバルは、議長の地位にありながら9月のザグレブの知識人大会に参加し、ダヴィドヴィッチ路線の支持を鮮明にしていたためである。急進党議員の多くはこの機会に民主党との連立を解消することを求めたが、党首のパシッチは、「憲法に忠実な人物」を条件に民主党から議長を出すことに同意した。これは民主党の分裂をねらった策であった。急進党と民主党は代表を出して意見調整をおこなったが、両党は候補者を一本化できなかった。結局、民主党は妥協的解決として二人の候補を立て、自由投票で決めるという提案をした。一人はダヴィドヴィッチ派のリバルであり、もう一人はプリビーチェヴィッチ派のスロヴェニア人議員エド・ルキニッチであった。この案は急進党も受け入れた。多数派の形成に自信があったからである。議会での投票（総数225）の結果は、ルキニッチが124票、リバルは88票であり、予想通り急進党議員の支持を得たルキニッチがリバルを破って当選した⁸⁴。

パシッチの思惑通り、議長選挙は民主党の内紛を促進した。だが、パ

シッチと急進党にとって、喜ばしい事態ばかりではなかった。1920年11月の憲法制定議会選挙以来、ベオグラードを中心とする中央集権的な政治体制は、連立のパートナーである民主党が一体となって政権に協力することで支えられていた。たとえば、議会での法案の成立には、急進党と民主党の議員全員の一致協力が得られなければ、議決に必要な得票を集めることはできなかった。したがって、パシッチらが党利党略で仕掛けた民主党に対する分裂工作は政権運営の行き詰まりという副作用を伴っていた。急進党との結託をあからさまに示したプリビーチェヴィッチ派に対抗するため、ダヴィドヴィッチ派はパシッチ内閣打倒の意思を固め、中央集権主義の修正を求めるクロアチア・ブロックとの連携をこれまで以上の決意で模索することになったからである。

ダヴィドヴィッチ派は二つの方法でパシッチの政権運営を妨害した。一つは民主党閣僚を利用した倒閣運動である。二人の議長候補者を出すことを決めた民主党議員クラブ総会で、ダヴィドヴィッチ派は重要な提案を採択することに成功していた。それは10月23日のクマノヴォの戦いの記念式典の後、内閣に総辞職を求め、急進党がこれに応じない場合には、民主党の閣僚は率先して辞表を提出するというものであった。しかし、プリビーチェヴィッチ派が多数を占めていた民主党の閣僚は、内外情勢の緊迫化を理由に政権の継続を主張し、辞表の提出を拒否した。これに対して、党首のダヴィドヴィッチは、議会により強い支持基盤をもった新しい政権を樹立するために、現政権はいったん辞職しなければならないと主張し、民主党の閣僚に党の機関決定の遵守を求めた。両派の論争は激化し、民主党は再び分裂の危機に陥った。しかし、この争いは、ダヴィドヴィッチ派が要求を取り下げることで和解が成立し、民主党の分裂は回避された。その背景には、クロアチア・ブロックとの交渉の進展があった。ラディッチが懸念するように、内閣の辞職に伴って議会の解散がおこなわれれば、クロアチア・ブロックが議会に来る可能性がなくなってしまうからであった⁸⁵。

もう一つは、政府提出法案に対する修正要求である。1922年11月初め、

パシッチ政府は三つの重要法案の採択をめざしていた。その一つは「国家公務員法」であったが、ダヴィドヴィッチ派の民主党議員は、憲法の基本原則に対する違反を理由に法案の一部に修正を要求した。最大の争点となったのは、「国家公務員であることができない者」の中に含まれていた「国家形態の変更を主張する思想信条を公然と吹聴する者」という条文であった。これは、共産主義者のほか、君主制に反対するクロアチア共和農民党の支持者を国家公務員から排除することを意図していた⁸⁶。しかも、この条文は、プリビーチェヴィッチの強い要求によって法案に追加されたものであった。だが、それだけにクロアチア・ブロックとの交渉を成功させたいダヴィドヴィッチ派にとっては、どうしても承認できないものであった。プリビーチェヴィッチ派の民主党議員の主張によれば、この条文の挿入について、民主党の議員クラブは事前に了承の決定を出しており、民主党の全議員はこれにしたがう義務を負っているはずであった。だが、ダヴィドヴィッチ派の民主党議員は、これを「時代錯誤的で反動的な規定」と非難して、法案のテキストに含めることに強く反対した⁸⁷。彼らがこのような態度をとったため、政府は法案の議会への上程を延期せざるをえなかった。法案の採択に必要な賛成票の確保が見込めなかったからである。同様に、残りの二つの法案（「戦争傷痍者補償法」と「農業者への融資に関する法」）の上程も延期され、国民生活に重大な影響を与えた。

11月末、ダヴィドヴィッチ派とクロアチア・ブロックとの交渉が山場を迎えていたとき、急進党とプリビーチェヴィッチ派は決定的な反撃を始めた。11月28日の急進党議員クラブの会合でパシッチは、セルビアの反政府勢力との協定に意欲を示したクロアチア・ブロックの声明を読み上げ、ダヴィドヴィッチ派とクロアチア・ブロックとの交渉によって民主党との政権協力は不可能になったと結論づけた⁸⁸。12月2日、急進党議員クラブは、パシッチの状況分析に基づいて、現内閣を総辞職させる決定をおこなった。12月3日の閣議でパシッチは急進党の決定を閣僚に伝えた⁸⁹。12月4日、連立内閣は総辞職した⁹⁰。

内閣の総辞職を決めたパシッチは二つの意図をもっていた。一つは、何よりもダヴィドヴィッチとクロアチア・ブロックとの交渉を挫折させることであった。もう一つは、政治危機の責任をすべて民主党ダヴィドヴィッチ派に押し付けることであった。これによって、民主党を弱体化させ、あわよくば分裂に追い込んで、ライバルの政治集団を政権から排斥することをパシッチはねらった。他方、プリビーチェヴィッチ派にとって、民主党を権力から排除しようとするパシッチの策謀は大きな脅威であった。しかし、彼らは、むしろ急進党からの威嚇を利用して派閥抗争を有利に闘おうとした。政権の座から退くことは民主党の議員全員にとって大きな痛手であり、議員クラブの議論でこの危険性を提起することによって、ダヴィドヴィッチ派の責任を追及すると共に、両派のどちらに味方するかを決めかね、日和見主義的な態度をとっている議員を自陣営に引きつけようと彼らは考えた。

12月5日、プリビーチェヴィッチ派議員8名の要求により、民主党議員クラブの総会が急遽招集された。閣僚の一人であったプリビーチェヴィッチは、内閣辞職の理由について、「連立政権を構成する一部のグループが、政権打倒を企図して反政府諸勢力と交渉をおこなった」という急進党側の見解を論評することなくそのまま述べた。このあと、プリビーチェヴィッチ派とダヴィドヴィッチ派の間で議論の応酬が始まった。プリビーチェヴィッチはダヴィドヴィッチの行動を容赦なく批判し、こう述べた。ヴィードヴダン憲法を支持する立場をとらない政党とダヴィドヴィッチが話し合いをおこなったのは党首の職責に反する行動だ。クロアチア・ブロックとの協定は憲法修正なしには成立しないのだから、彼らとは話し合うことはできないはずだ。続けてプリビーチェヴィッチは、クロアチア・ブロックのような「反国家分子」が入閣するような政権の形成には断固として反対すると述べた。ヴェツェスラフ・ヴィルダーは、政権打倒をねらったダヴィドヴィッチの行動は民主党の基盤と理念を揺るがせたと述べた。彼の見解によれば、民主党は、党を創設し強化することによってクロ

アチア問題を解決しようとしてきたのに、現在の党は自身を弱体化させることによってクロアチア問題を解決しようとしているとのことであった。プリビーチェヴィッチは、会議に参加していた議員に向けて、こう強調した。政権の危機の決着に民主党が積極的に関わることを望むならば、この議員クラブの決議は明瞭明快でなければならない。その決議からダヴィドヴィッチ派の策謀の継続が疑われるようであれば、民主党は新しい政府に参加できなくなるだろう⁹¹。

これに対して、ダヴィドヴィッチ派の反論は控えめであった。彼らは、もっぱら釈明に努め、ダヴィドヴィッチの行動は党の決議や綱領を逸脱していないことを明らかにしようとした。たとえば、パヴレ・アンジェリッチは、クロアチア・ブロックとの交渉は自分のイニシアチブでおこなった行動であり、ダヴィドヴィッチに責任はないことを強調した⁹²。ダヴィドヴィッチ自身もこう弁明した。クロアチア・ブロックの指導部とはこれまで対話を試みてきただけであって、交渉をしてきたわけではない。これは10月12日の党決議で党首に認められた権限に基づいてとった行動だ。この話し合いの中で彼の側からは憲法の修正を提起したことは一度もない。また政権打倒を無条件に提案したこともない。ただ現在の連立政権に代わりうる、より多くの政党が参加する挙国一致政権の可能性について話し合っただけだ。注目すべきは、ダヴィドヴィッチ派が、彼らの行動は党の利益にかなっていることを強調した点である。そこには、クロアチアのセルビア人を主要なメンバーとするプリビーチェヴィッチ派と、旧セルビア王国内で急進党と選挙の地盤が競合するダヴィドヴィッチ派の考え方の相違が鮮明に表れていた。ダヴィドヴィッチ派はこう主張した。民主党は、急進党の補完勢力の地位に甘んじていることはできない。急進党以外の政党との協力関係を別の選択肢としてもっておくことが必要である。ところが、民主党は、クロアチア政策で急進党の支持を得るために、あらゆる地域で急進党に追随する政党になってしまった。しかしながら、セルビアにおける民主党の躍進は、急進党との政策上の相違を世論に提起することによつ

て初めて可能となる。民主党は、急進党に対する過度の密着・依存関係から抜け出すことが喫緊に求められている⁹³。

民主党の議員クラブの議論は、12月7日に党決議を採択して結末を迎えることになった。6人の委員が選ばれ、彼らは次のような内容の決議案を作成した。1. 民主党党首のリュバ・ダヴィドヴィッチは、党機関に通知しその承認を受けることなく、自らの判断により、様々な政治集団の指導者と話し合いをおこなった。この中にはクロアチア・ブロックとの話し合いが含まれる。2. ダヴィドヴィッチは党の綱領に一度も背く行動はとらず、これらの話し合いの中ではヴィードヴダン憲法の修正は一度も話題にならなかった。この話し合いはすでに打ち切られている。3. 内閣の辞職後の新しい政局においては、1921年10月30日の党決議の精神に則って、民主党は、ヴィードヴダン憲法を擁護する立場に立つ議会主義的な政治勢力とのみ交渉をおこなう。この決議案に目を通したダヴィドヴィッチはその内容に驚き、党と議員クラブに辞表を提出した。決議案はプリビーチェヴィッチ派の主張のみが大きく取り入れられており、ダヴィドヴィッチはこれをとって承伏できなかつたからである。この決議案はただちに民主党議員クラブの採決にかけられた。投票の結果は、賛成42、反対30、保留4であり、決議案は採択された。政権喪失の危機を党所属議員に訴えたプリビーチェヴィッチ派の戦術はひとまず成功を収めたのである⁹⁴。

12月8日、民主党議員クラブは、連立政権に引き続き参画するための協議を続けた。彼らは、前日に採択された決議に沿って、政権の危機を解決するためとして、次のような方針を作成した。1. 憲法修正を容認する傾向をもたない政党と連立政権を構成する。2. 連立政権に参加する政党には、ヴィードヴダン憲法を擁護しない立場に立つ政党とは交渉をおこなわないことを義務づける。3. もっとも緊急に成立が求められている法律（戦争傷痍者補償法、国家公務員法、農業者融資法）を議会で成立させる。この決定は投票をせずに採択された。ダヴィドヴィッチ派の議員は沈黙していた。民主党はこれによって表面的に党の結束を維持し、民主党が新し

い政府に入る資格のある政党であることを急進党に示したつもりであった。急進党との連立協議のための委員が選ばれ、辞任を表明した党首のダヴィドヴィッチに代わって副党首のアンドリア・ラドヴィッチがその代表を務めることになった⁹⁵。

急進党にとって、民主党がおこなった路線対立の決着はけっして満足できるものではなかった。彼らは、できればこの機会に民主党が分裂してくれることを期待していたからである。12月8日の急進党の議員クラブの会合では、民主党に対して不満が噴出した。彼らの眼には、12月7日の民主党議員クラブでの採決の結果は、正反対の政策を主張するグループが民主党内にほぼ勢力を拮抗して存在することを示しているだけのように見えた。パシッチもこう非難した。このような決着の仕方では民主党が本当に信頼の置けるパートナーなのか確信がもてない。批判を加えたグループと一緒にいるということは、時間がたてば彼らはまた同じことを繰り返すのではないか⁹⁶。

内閣総辞職のあと、パシッチは国王から再び組閣の任を受けた。国王の当初の意向は連立政権の形成であった。民主党も連立政権に積極的に協力する意思を示した。ところが、12月12日、パシッチは民主党との連立の意思がないことを国王に伝え、首班指名を返上した。パシッチの主張は、民主党の分裂を前提にプリビーチェヴィッチ派のみを政権に受け入れることであった。国王は再びパシッチを首相に指名した。12月13日、急進党と民主党の議員クラブは合同会議を開いた。民主党のラドヴィッチとプリビーチェヴィッチは、民主党全体が連立政権に協力の意思があることを強調して、パシッチの説得に努めた。しかし、急進党議員クラブの代表は民主党には政権協力の可能性がないと述べて政権参加を拒否し、受け入れるとすればプリビーチェヴィッチ派のみであることを主張した⁹⁷。

1922年12月16日、パシッチは急進党単独政権を発足させた。それは選挙管理内閣であり、議会を解散し、総選挙を告示する許可を国王から得ていた。投票日は1923年3月18日と定められた。したがって、急進党は3ヶ月

間もの間、議会と対峙することなく政権を担当することになった。民主党は声明を発表し、このような単独政権の樹立はこれまで築き上げてきた「国家創造戦線」の破壊を意味し、その結果の責任は急進党が負うことになると述べた⁹⁸。

パシッチとプリビーチェヴィッチは水面下で政権協議をしていたが、それは実を結ばなかった。プリビーチェヴィッチ派は、パシッチらが求めていたように党を割って、急進党政権に加わることをしなかった。その背景にはいくつかの原因が指摘されている。第一に条件面で折り合えなかった。プリビーチェヴィッチ派にとって、選挙を控えて民主党からの離脱を決断するためには、そのデメリットを十分にカバーするような好条件の提示が必要であった。たとえば、閣僚ポストとその数である。ところが、急進党指導部はあれだけプリビーチェヴィッチ派の政権への受け入れを表明していたにもかかわらず、プリビーチェヴィッチ派が納得するような条件を提示しなかった⁹⁹。私見であるが、この内閣は暫定的な選挙管理内閣であり、議会は解散されたので、法案を可決するために多数派を形成することも必要でなかった。したがって、急進党としては単独政権でもとくに不都合はなく、あえて好条件を提示してプリビーチェヴィッチ派に政権参加を求める必要もなかった。プリビーチェヴィッチはこのような急進党の態度を察知し、自らのグループを安売りするような選択には踏み切れなかったと考えられる。

第二に、より重要な要因として、急進党の指導部は本音の部分ではプリビーチェヴィッチ派を政権に受け入れない方が得策だと考えていたことである。その理由として、一つには、パシッチらは、民主党ダヴィドヴィッチ派とクロアチア・ブロックとの交渉を厳しく批判していながらも、実際にはラディッチとの交渉の可能性を排除していなかったことがある。その証左は、急進党の元幹部ストヤン・プロティッチとラディッチとの交渉をパシッチらは一度も批判したことがなく、むしろこれを急進党の別働隊のごとく容認してきたことである。杓子定規な原則主義者のプリビーチェ

ヴィッチとは違って、パシッチを始めセルビアの指導者はみな柔軟なリアリストであった。クロアチア・ブロックはクロアチアで絶大な支持を得ている勢力であり、国政の安定のためには弾圧するよりも懐柔する方が得策であった。したがって、ダヴィドヴィッチがそう考えたように、条件を整えば彼らと手を結んでもよいとパシッチは考えていた。その場合、中央集権主義と反クロアチア政策の急先鋒であるプリビーチェヴィッチ派の存在は、クロアチア・ブロックとの交渉の障害となることは必定であった。もう一つは、急進党内には、プリビーチェヴィッチを不倶戴天の敵とする実力者プロティッチの支持者がかなりいたことである。したがって、プリビーチェヴィッチ派の政権への受け入れはこれらのグループの反発を招き、急進党の結束を揺るがせる恐れがあった¹⁰⁰。

しかしながら、連立政権の崩壊に決定的な役割を果たしたのは国王アレクサンダルであった。急進党のパシッチが民主党との連立政権を拒否して首班指名を返上したとき、国民議会議長のエド・ルキニッチは、慣例により、首相候補者を国王に推薦するために宮廷に出向いた。ルキニッチは、連立政権維持の見地から、パシッチがどうしても考えを変えない場合には、民主党のダヴィドヴィッチの首班指名を国王に助言した。国王は、不文律として、国民議会議長の推薦を受け入れなければならなかった。その場合には、民主党が主導権を握る連立政権が誕生し、政局は大きく変わっていたはずであった。ところが、アレクサンダルはあえて急進党単独政権の形成を容認し、再びパシッチを首相に指名した。この裁定を不審に思ったダヴィドヴィッチがアレクサンダルに謁見し、その理由を聞いたところ、彼は、パシッチの首班指名はルキニッチの助言にしたがっただけだと述べた。これは事実と反していた。ルキニッチは国王が自分の説明に納得し、連立政権は維持されるという見通しを盟友のプリビーチェヴィッチに伝えていたからである。

1922年末の政治危機に際してアレクサンダルがとった態度は、ダヴィドヴィッチ派の計画に対する国王としての意思を示していた。それは、君主

制に反対する政治勢力と手を結ぼうとする民主党ダヴィドヴィッチ派の行動に対する拒絶を意味していた。アレクサンダルがルキニッチの助言にしたがって、ダヴィドヴィッチを首相に指名した場合、ラディッチとの交渉は一気に進展し、クロアチア・ブロック所属の議員がベオグラードに到来し、新しい政治の流れが形成される可能性が大きかった。しかし、アレクサンダルは、ヴィードヴダン憲法に基づく国家秩序をクロアチア・ブロックが承認しない限り、彼らの議会への参加を認める気はないことをすでに明らかにしていた。したがって、国王は急進党単独政権の形成を容認することによって、ダヴィドヴィッチ派の計画を挫き、クロアチア・ブロックの来訪を阻止しようとした。国王が、あえて虚言を口にして、プリビッチェヴィッチ派とダヴィドヴィッチ派の反目を深めようとしたのも、パシッチの見地を採用し、民主党を弱体化させるためであったと考えられる¹⁰¹。

7 ヴィードヴダン憲法体制の基本問題

ヴィードヴダン憲法は、1918年12月1日の国家統合以来、ベオグラード政府が半ば強権的に築き上げ、既成事実にしてきた国家制度を二つの側面で強化した。一つは君主制の政体であり、もう一つは中央集権制である。

第一の点については、ヴィードヴダン憲法の総則は、セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人の国家は憲法に基づいて議院内閣制をとる君主制国家であることを述べる。正式な国家の名称は「セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人の王国」である。この憲法によれば国家のもっとも重要なファクターは国王であり、国王は立法・行政・司法の各分野において最高権力を有する。立法権は国王と国民議会が行使するが、憲法の規定は国王の権限が議会の決定に優先することを定める。国民議会が可決した法律は国王がこれに署名し、公布することによって初めて効力をもつ。国王が署名を拒否すればその法律は効力をもたない。したがって、議会が可

決した法律に対して国王は拒否権を有する。また国王は国民議会を召集および解散する権限をもち、場合によっては国民議会の機能を停止する権限さえもつ。国王は行政機構の頂点に立ち、内閣の閣僚および最上級の国家公務員は国王が任命する。内閣閣僚は国王に対して責任を負うが、国王自身はいかなる政治的責任も負わない。国王は対外的に国家を代表し、外国との条約を締結し、批准する。国王はまた外交関係を打ち切り、戦争を宣言し、講和条約を結ぶ権限をもつ。最後に司法面では、最高裁判所の判決は国王の勅令によって執行される。

第二の点については、ヴィードヴダン憲法の制定によって、地方政府が完全に廃止されることになったことが重要である。南スラヴ人王国は、セルビア王国と旧オーストリア＝ハンガリー領南スラヴ人諸地域が合併して出来上がった国家であり、統一国家の発足時、ポクライナ (pokrajna) と呼ばれた旧オーストリア＝ハンガリー領の地域には地方行政府が残っていた。スロヴェニア、クロアチアおよびスラヴォニア、ボスニア・ヘルツェゴヴィナといった地域はみなポクライナである。オーストリア＝ハンガリー帝国はこれらの地方政府に地方議会とワンセットで一定の自治権を認めてきた。これに対して、ベオグラードの中央政府は、地方議会の機能の停止、地方政府の首長の国王による任命制への変更、地方政府の行政部門の縮小、中央政府が制定する政令による法令の一元化などの措置を矢継ぎ早に出して、地方政府を中央政府の統制下に置いてきた。しかし、地方政府の組織自体はなお存続していた。したがって、ヴィードヴダン憲法はその条文の中にポクライナと地方政府の存在を認めないことで、国家の中央集権化を完成させたのである。

ヴィードヴダン憲法は国家の内部に四つのレベルの行政単位を設定する。それは規模の順に述べると、州 (oblast)、県 (okrug)、郡 (srez)、町村 (opcina) である。このうち最大の行政単位である州の特徴は、旧来の地域単位であるポクライナに比べて規模がずっと小さいことである。憲法には細かな行政単位の区分は記されていないが、これを補うべく1922年

4月に成立した法律は、国家を33の州に分割することを予定していた。この結果、従来のクロアチアの二つのポクライナ（クロアチアおよびスラヴォニアとダルマチア）は6つの州に分割されることになった。もともと、ヴィードヴダン憲法は地方分権を完全には否定していなかった。州には議会を設け、法律に抵触しない限りで一定の自由裁量を認めていた。ただし、州の長官である知事は国王が任命し、州の行政機構は中央政府の統制下に置かれた。つまり、ヴィードヴダン憲法は、行政単位を細分化することで地方に対する中央の統制をより徹底しようとしたのである。

しかし、以上の措置は大きな問題をはらんでいた。第一にヴィードヴダン憲法は国王に対し、議会に優越し、絶対的ともいうべき大きな権限を認めていることである。これはこの国の憲法の歴史からみて反動的な側面があった。というのは、ヴィードヴダン憲法の原型となった1903年制定のセルビア憲法はベルギー国憲法（1831年）を手本とし、西欧的な自由主義と民主主義を基礎原理とし、その上に君主制を認めようとしていたからである。このことの背景には、前の支配者であったオブレノヴィッチ王朝が悪名高い独裁政治をおこない、これがクーデターによってようやく打破された直後であったので、当時のセルビアの政党指導者は何よりも自由主義的議会民主制の確立を欲したことがあった。ところが、このたびの憲法制定過程では、セルビア人を中心とする与党の政治指導者は、共産党やクロアチア共和農民党などの反政府政党が民衆の支持を得て勢力を伸ばすことを恐れて、議会の権限を制限して国王に絶対的な権限を付与するような憲法を作成した。このことは政党政治にとって自殺行為であった。数年後に国王はこの権限によって自ら独裁政治を宣言し、議会政治を終焉させることになったからである。

第二にその審議と採決の過程からも明らかなように、ヴィードヴダン憲法はどうみてもユーゴスラヴィア国民の総意を反映した憲法とはいえなかったことである。1920年11月の憲法制定議会選挙の結果は、国家統合後の中央集権主義政策に対する国民の根強い不満を示していた。それにもか

かわらず、政府は、審議の過程ではクロアチア人やスロヴェニア人政党が出していた地方政府と自治権の復活の提案にはいっさい耳を貸さなかった。採決の過程では、政府は、クロアチア共和農民党を始め反対勢力による議会のボイコットに助けられ、かつスロヴェニア農業者党やムスリム人政党を政治的に買収することによってかろうじて過半数の賛成を確保し、この憲法を可決させた。この憲法は大多数のクロアチア人やスロヴェニア人の政治家に受け入れられなかったばかりでなく、ストヤン・プロティッチのようにセルビアの有力な政治指導者の中にもこれに反対していた者がいた。

したがって、ヴィードヴダン憲法が制定されてからわずか一年後に憲法修正がセルビア人とクロアチア人の政治家の間で政治的駆け引きの材料となったのは不思議なことではない。民主党党首のリュバ・ダヴィドヴィッチがステパン・ラディッチ率いるクロアチア・ブロックと政治的連携を模索した1922年の後半は、ユーゴスラヴィア国民の大きな不満を背景にセルビア人とクロアチア人の政治指導者が妥協点を求めて対話を開始した時期であった。しかしながら、1922年という年は、セルビア人とクロアチア人の交渉が本格的に進展するにはいささか早すぎたようである。いくつかの理由を指摘しておきたい。

第一にセルビアの政治指導者の中ではクロアチア・ブロックに対するアレルギーがまだ根強かったことである。たしかに暴力革命を否定し平和主義を標榜するクロアチア共和農民党は、ソ連を模範とする共産党ほど脅威を与える存在ではないことはセルビアの政治家に知られるようになっていた。そうであるからこそ、ラディッチに対してダヴィドヴィッチやプロティッチといったセルビア人の政治指導者は交渉の意思を示したのである。しかし、彼らはまだマイノリティであり、この時点では、セルビアの多くの政治指導者にとって、共和主義者のラディッチと手を組むなどということはきわめて大きな冒険に見えた。国王を中心とする宮廷の勢力も同様の警戒感が強かった。それゆえ、民主党の路線を決定した1922年12月の

議員クラブ総会では、ダヴィドヴィッチに近い議員でさえ、プリビーチェヴィッチ派の用意した決議案に賛成票を投じたのである。

第二にラディッチの政党がちょうど成長途上であったことである。たしかにクロアチア大衆農民党は1921年11月の選挙で50議席を獲得して勝利を収めた。しかし、このとき彼らはクロアチアおよびスラヴォニアの選挙区に候補者を擁立しただけであって、他のクロアチア人の居住区であるダルマチアやボスニア・ヘルツェゴヴィナの選挙区には候補者名簿を提出していなかった。それゆえ、クロアチア共和農民党はさらなる党勢の拡大を期してダルマチアとボスニア・ヘルツェゴヴィナのクロアチア人を組織化し、党の綱領と政策を浸透させようとしていたが、その成果が得票と議席の形で現れるのは次回の選挙を待たなければならなかった。ラディッチ自身も党勢の拡大に大いに自信を持っており、民主党のダヴィドヴィッチの要請を断ったのもこの時点で反政府の姿勢を転換するのは得策ではないという判断が最終的には勝ったのではないかと考えられる。

第三にこの時期のラディッチは、スロヴェニア人およびボスニア・ヘルツェゴヴィナのムスリム人との連携が不十分であったことである。スロヴェニア人の政党指導者はこの時期、クロアチアの自治権の樹立のみを視野に置くクロアチア・ブロックの綱領は支持できないものであったし、議会外での活動に重点を置く戦術には否定的であった。ボスニア・ムスリム人の政党、たとえばユーゴスラヴィア・ムスリム組織に対しては、ラディッチはまったくの接触がなかった。しかし、スロヴェニア人やボスニア・ヘルツェゴヴィナのムスリム人はポクライナや自治権の復活などの共通する利害があった。クロアチア人の人口は全体の23%であり、これに対してセルビア人の人口は全体の43%であった。したがって、いくらクロアチア人の組織化を進めても単独ではセルビア人の勢力に対抗していくことには無理があった。いいかえると、スロヴェニア人やボスニアのムスリム人との連携がなければクロアチア・ブロックの交渉力は限定されたものとなることは明らかであった。

以上の制約が徐々に解除されていく翌1923年は新たな緊張の段階が幕明けとなる。それは、本稿で取り上げたクロアチア問題が、ユーゴスラヴィア全体の国家制度をめぐる問題として再定義される段階である。それゆえ、ユーゴスラヴィア国家に内在する不安定要因は誰の目にも明らかになったものの、南スラヴ人の政治家にとって、問題解決のための最初の「修羅場」はまだ先に控えているといわなければならない。

注

- 1 1918年11月23日に旧オーストリア＝ハンガリー領南スラヴ人の代表組織である国民評議会は「ナプタク」と呼ばれる交渉の指針を決定した。その第11条によれば、「経過期間においては、これまでの法律・法令、行政・司法制度、地方政府機関はすべて有効とする」とされていた。
- 2 Ivo Banac, *The National Question in Yugoslavia*, Cornell University Press, 1988, p.13.
- 3 イタリアは、1882年にドイツおよびオーストリア＝ハンガリーとの間で三国同盟を結んでいた。ところが、第一次世界大戦勃発後、イタリアはドイツ側に加わらず、中立を宣言した。イタリアはより有利な参戦条件を引き出すため、両陣営と交渉していたが、最終的には協商国の側に立って参戦することで合意した。その際に結ばれた秘密協定がロンドン条約であり、1915年4月26日に正式に調印された。この条約の中で、イギリス、フランス、ロシアの三国は、イタリアが協商国の側に立って参戦することと引き替えに、次の三つの条項で、オーストリア＝ハンガリーの領土を戦後にイタリアに割譲することを約束した。(1)トレンティノ、ブレンナー峠以南の南チロル地方全域、(2)トリエステ、ゴリツィア、グラディツァ、カルニオーラおよびカリニンツィアの一部、(3)北ダルマチアおよびその島嶼部。これらの地域はイタリア人が居住し、またかつてのローマ帝国の版図でもあったので、イタリア国内では「回復せられざるイタリア」と呼ばれていた。しかし、このうち(2)の地域には、50万人のスロヴェニア人とクロアチア人が、(3)の地域には50万人のクロアチア人が居住していた。
- 4 この条約ではオーストリアとの国境では、スロヴェニア人が多数居住する地域の帰属が未解決になったが、1919年10月10日、クラークンフルトの連合国委員会の監視のもと同地区の住民の意思を問う住民投票が実施された。投票の結果は、2万2025人がオーストリアに帰属の意志を示し、南スラヴ人王国に投票したのは1万5279人であった。この結果、この地域のオーストリアへの帰属が決定した。この地域はスロヴェニア人が多数を占めるにもかかわらず、住民の多くが南スラヴ人国家への参加を望まなかったわけで、このことは南スラヴ人王国政府に大きな衝撃を与えた。
- 5 パリ講和会議を実質的に指導したのは、アメリカ、イギリス、フランス、イタリアの四か国であった。このうち、イギリスとフランスはロンドン条約の当事者であり、

イタリアの要求を認めざるを得ない立場にあった。これに対して、南スラヴ人王国の立場を代弁したのは、ロンドン条約に拘束されないアメリカであった。アメリカ大統領ウィルソンは、イギリスとフランスの立場に妥協し、南チロルとトリエステならびにイストリア地方（ゴリツィア、グラディッア、カルニオーラおよびカリンツィアの一部）についてはイタリアに割譲することに合意したが、リエーカ以南のダルマチア地方については、南スラヴ人王国の主張を強く支持した。

オーストリアとのサン＝ジェルマン条約が調印された直後の1919年9月12日、イタリア人詩人のガブリオ・ダンヌンツィオは約2500人の義勇兵を率いて9月12日リエーカ（イタリア名フィウメ）に入り、フィウメ民族評議会の支持を受けて、同市の支配権の掌握を宣言した。しかし、イタリアを含めてパリ講和会議はこれを認めなかった。1920年1月21日にパリ講和会議は終結したが、南スラヴ人王国とイタリアとの国境はなお確定していなかった。連合国の側も匙を投げた格好で、両国は直接交渉で決着をはかることになった。

- 6 イタリアと南スラヴ人王国との最後の交渉は、1920年11月、ジェノヴァに近いラパロという町で始まった。交渉に先立ってイギリスとフランスは、南スラヴ人王国の代表団に対して、今回も交渉が決裂すれば、イタリアがロンドン協定によって認められた領土を獲得することを両国は容認することを伝えていた。南スラヴ人王国の強力な支援者であったアメリカのウィルソンは大統領選挙に落選して、その地位になく、国内では、ベオグラードの指導部と摂政アレクサンドルは、領土を多少犠牲にしても、国境確定交渉を早期に終結させることを求めている。他方、この年イタリアは、占領部隊を派遣していたアルバニアで現地人勢力の反撃にあって手痛い敗北を被った。国内では厭戦気分が広がり、勢力を強めた左派勢力は対外干渉に反対し、外交的要求に迫力を欠く事態に陥っていた。この結果、両国は歩み寄り、11月12日にラパロ条約は成立した。この条約によって、イタリアはトリエステ、スニエージニクからイドリアに至るイストラ半島、ザダルのほか、アドリア海のいくつかの島（クレス、ロシーニ、ラストヴォ、パラグルジャ）を獲得した代わりに、その他のダルマチア地方への要求は放棄した。またラパロ条約は、リエーカを自由都市としたが、市民はイタリア国籍を得ることが可能とした。以上、Hrvoje Matković, *Suvremena politička povijest Hrvatske, Ministarstvo unutarnjih poslova Republike Hrvatske, 1995, p.81*による。

なおイタリアとならんで大きな問題であったのは、アルバニアとの国境確定である。第一次世界大戦中、協商国は、イタリアと結んだロンドン条約の代償として、アルバニアの北部および南部を、モンテネグロ、セルビア、ギリシアが分割することを容認すると密約を与えていた。1918年9月のブルガリアの降伏のあと、オーストリア軍はアルバニア北部および中部から撤退し、フランス、セルビア、イタリア軍がこれらの地域を占領していた。パリ講和会議では、北アルバニアを新しく誕生した南スラヴ人王国に与え、ギリシアにも南アルバニアを領有させるという案をイギリスとフランスが提出したが、ウィルソン大統領は強硬に反対したためこの案は撤回され、アルバニアについては決定のないまま講和会議は終了した。その後、一度はアルバニアから撤退した南スラヴ人王国軍は1921年10月に再度北アルバニアに侵攻したが、国際連盟の大使会議は1913年のアルバニア国境を原則的に再確認する決議をおこない、南

スラヴ人王国軍は撤退を余儀なくされた。その後、1922年にアルバニアの独立は国際的認知を受け、1927年7月30日、南スラヴ人王国は、ギリシア、イギリス、フランス、イタリアと共に国境画定協定に署名した。以上、木戸翁『バルカン現代史』、山川出版社、1977年、197-200頁。

- 7 1920年2月、民主党ダヴィドヴィッチ内閣は、野党に打撃を与えるため、臨時国民議会の解散と総選挙の告示をおこなうことをめざしたが、摂政アレクサンダルは、まだ選挙の条件が整っていないとしてこれを裁可しなかった。そのため、ダヴィドヴィッチ内閣は総辞職した。
 - 8 ただヴェスニッチの登場には、パリに滞在していた急進党の党首ニコラ・パシッチならびに国内にいた彼の側近の影響もあった。パシッチに代わって急進党を指導していたナンバー・ツーのストヤン・プロティッチは、この時期、自治権の回復を求めるクロアチア人やスロヴェニア人に寛容な態度を示しすぎて、急進党内で孤立していた (Josip Horvat, *Politička Povijest Hrvatke 2*, August Cesarec Zagreb, Zagreb, 1990, p.189)。
 - 9 この選挙法によると、全国55の選挙区の議員定数は、1910年の国勢調査の結果に基づき、人口3万人につき1人の議員が割り振られ、17000人を超えると1人追加された。議員定数の最大は21、最小は3である。議員総数は419人となったが、第一次世界大戦中に犠牲者の多かったセルビアはより多くの議員数が割り振られることになった。有権者は21歳以上の男子であり、これは納税額や識字能力の有無にかかわらない。女性と軍人は選挙権をもたなかった。ただし、21歳以上の男子であっても有権者となるためには投票日に6ヶ月以上その選挙区に継続して居住している必要があった、このため仕事を求めて居住地を変えることが多い貧農や労働者は選挙権を取得できないケースが予想されたが、これは共産党の支持基盤に打撃を与えることをねらったものであった。被選挙権者は、25歳以上の男子で読み書きができることが条件であった。候補者名簿には4人に1人の割合で大卒または高等専門学校卒者を入れる必要があった。ただし、閣僚と法律を専門とする大学教授を除いて国家公務員は被選挙権をもたず、裁判官も被選挙権がなかった。投票は直接の秘密投票で、議席は得票率に応じて割り振られた。この選挙法は今回の憲法議会選挙にのみ有効とされた (以上、主としてHorvat, *Politička Povijest Hrvatke 2*, p.192による)。
- なおこの選挙法のもう一つの特徴は、少数民族の一部に選挙権を認めなかったことである。それらは国際協定によって出身母国での選挙権を有する民族であり、ドイツ人、マジヤール人、ルーマニア人、イタリア人、ユダヤ人であった。これに対して、チェコ人、スロヴァキア人、ロシア人、ポーランド人、ブルガリ人、アルバニア人、トルコ人は選挙権を有した (Branislav Gligorijević, *Parlament i političke stranke u Jugoslaviji 1919-1929*, Institut savremenu istoriju, Beograd, 1979, p.70)。
- 10 投票率がとくに低かったのは、ダルマチア (56.1%)、セルビア (56.3%)、マケドニア (57.5%) であった。なお1912年のセルビア総選挙の投票率は73%であった (Ibid., p.81)。
 - 11 民主党幹部は130から180議席の獲得を見込んでいた。なお総選挙の政党別の集計結果については、得票数については一致していながら、獲得議席については異説があり、

- 民主党92と急進党91の獲得議席を、民主党94、急進党89と述べる文献もある。戦後ユーゴスラヴィアの公式統計（たとえば、Jugoslavia 1918-1988 statistički godišnjak, savezni zavod za statistiku, Beograd, 1989, p.30）は後者を採用している。その理由は定かではないが、察するに選挙直後に民主党から急進党に移籍した議員がいたのではないかと考えられる。ここでは、1920年代ユーゴスラヴィアの政党政治の分析に定評のあるチュリノヴィッチ（Čulinović）、グリゴリエヴィッチ（Gligorijević）、およびホルヴァート（Horvat）にしたがって、民主党92、急進党91とした。
- 12 南スラヴ人王国の成立後、ラディッチは政治犯として大半の期間を獄中で過ごしていた。反王室的な言動を理由に最初に逮捕されたのは1919年3月21日であり、1920年2月27日まで投獄されていた。しかし、3月21日には再び逮捕され、8月4日には2年半の禁固の判決が下っていた。
 - 13 クロアチア大衆農民党の躍進とは対照的に、これまでの代表的なクロアチア人政党であり、連立政権にも参加していたクロアチア同盟は4議席にとどまり、惨敗した。彼らの敗因は、農村部の住民からまったく支持されず、地盤とする都市部でも、政府に対する妥協的態度によって支持を失い、クロアチア権利党に票を奪われたことにあった。Gligorijević, *Parlament i političke stranke u Jugoslaviji 1919-1929*, p.86.
 - 14 政府はただちに反論した。それによれば、クロアチア大衆農民党が過半数を獲得した選挙区はクロアチアの8つの選挙区のうち4つにすぎず、他の4つは別の政党が過半数を獲得していたといものであった。つまり、政府によれば、クロアチア大衆農民党はクロアチア人の過半数を代表する政党ではないということである。以上、*ibid.*, p.87による。
 - 15 憲法問題で政府のブレーンを務めていたベオグラード大学の公法学教授スロボダン・ヨヴァノヴィッチは、政府の立場を代表して、こう述べている。1918年12月1日の国家統合のセレモニーの際、旧オーストリア＝ハンガリー領南スラヴ人の代表組織である国民評議会は、セルビアの摂政アレクサンダルに対して、すべてのセルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人を単一の国家に統合することを求めた。その際、たしかに彼らの要請は「一つの国家」であって、「一つの王国」への統合ではなかったことは重要である。しかし、摂政アレクサンダルはその答礼において、国民評議会のシェーマを受け入れず、すべてのセルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人を「一つの王国」に統合することを強調した。このことによって、政体の問題はすでに解決している。我々の国家は1918年12月1日の建国の時点から、カラジョルジェヴィッチ王朝が君臨する君主制国家である。したがって、憲法制定議会はこれを勝手に変更することはできない。以上、Dragomir Džoić, *Federalističke teorije i hrvatska država*, Barbat, Zagreb, 1998, p.169-171、による。
 - 16 憲法制定議会の規程をめぐる議論については主に以下の文献による。Horvat, *Politička Povijest Hrvatske 2*, p.199、Gligorijević, *Parlament i političke stranke u Jugoslaviji 1919-1929*, p.89-91、Ferdo Čulinović, *Jugoslavija između dva rata 1*, izdavački zavod JAZU, Zagreb, 1961, p.312-315.
 - 17 Gligorijević, *Parlament i političke stranke u Jugoslaviji 1919-1929*, p.91-94.たとえば、パシッチは過半数による多数決を次のごとく正当化した。すなわち、南スラヴ

- 人は単一の民族であるから憲法制定議会の議決は過半数の賛成で十分である。もし3分の2の賛成が必要になれば3分の1の勢力が拒否権をもつことになり、多数の意思が実現せず、きわめて不合理である (ibid., p.93)。
- 18 規程が採択された以上、議員資格を得るためには、すべての当選者は国王に忠誠を誓わざるをえなかった。したがって、共産党の議員でさえ、議会への参加を優先して、「強制されたもの」として戦術的に国王に忠誠を誓うことにしたのである。
- 19 委員会は42人の委員から構成され、その政党別の内訳は、急進党11、民主党11、共産党7、農業者党4、国民クラブ・ユーゴスラヴィア・クラブ4、JMO3、共和党・社会民主党2であり、急進党と民主党で過半数を確保していた (Horvat, *Politička Povijest Hrvatke* 2, p.206)。
- 20 このうち主要な案は、Horvat, *Politička Povijest Hrvatke* 2, p.201-205, Čulinović, *Jugoslavija između dva rata* 1, p.322-329によれば、以下のようであった。

政府案

政府の憲法草案は、ミレンコ・ヴェスニッチに代わって1921年1月1日に首相に就任したニコラ・パシッチが提出した。それは高度に中央集権制的な行政機構と制限された一院制の議会主義を特徴としていた。それによれば、国土は35の州に行政的に分割される。州の人口は20万人から60万人(後に80万人)までとされた。各州の行政機関は中央政府の省庁の監督下に置かれ、その行政権限は地域的な事務処理に限定される。国家権力の中心機関は、国王、国民議会、政府である。国家のすべての下位機関はこれらに従う。国王は立法・行政・司法の最高機関としてあらゆる権力機関に優れた権限をもつ。国王は国民議会を召集・解散し、法律を裁可する権限をもつ。議会は一院制の議会とする。政府閣僚は国王が任命する。政府は議会と国王に対して責任を負うが、国王に対してより多くの責任を負う。司法権力は独立の裁判所が行使するが、判決は国王の名において言い渡される。

ストヤン・プロティッチの案

前首相のプロティッチは、第一次ヴェスニッチ内閣の中で憲法制定議会の準備を担当する閣僚を務めていた。プロティッチの案は中央集権的な国家制度を基本にしていたが、政府案とは異なって、歴史的な地域区分を考慮して国土の分割をおこない、地方政府の存在を認め、法律に沿って一定範囲の自治権を認めることを特徴としていた。プロティッチ案によれば、国土は9つの州に分割される。それらは、セルビア、旧セルビアとマケドニア、スリェムおよびバチカ、バナート、モンテネグロとヘルツェゴヴィナ、クロアチアおよびスラヴォニア、ダルマチア、スロヴェニアである。各州には地方政府と地方議会を置き、州議会には一定範囲の立法権を認める。ただし州の長官は国王と中央政府の代理人として、州議会および州の行政機関の決定を差し止めることができる。国家機関は、国王、議会、政府である。国王は国家権力の中心であり、あらゆる法律は国王の署名によって裁可される。首相は国王が任命する。政府閣僚は首相の推薦に基づいて国王によって任命され、国王と議会に等しく責任を負う。議会は上院と下院の二院制とする。下院議員は普通選挙によって選出され、上院議員は各州の代表62名と各産業

の代表38名から構成される。

農業者党の案

農業者党の案は、中央主権制と議会主義にもとづく農民国家の形成を描いた。農業者党は、南スラヴ人王国の人口の大半が農民で占められることを考慮し、農民の土地所有と農業経営を基礎に社会経済的秩序を構成することを主張した。国家機構の点では政府案とほぼ同様であり、国王、政府、一院制の議会を国家権力の中心機関とする。農業者党の案も中央集権的な行政機構を基本にするが、政府案と異なって、各州ならびにその下位単位の郡にまで一定の自治権を認めていた。

社会民主党の案

社会民主党の案は、大土地所有と大企業の社会化を主張する点に特徴があった。すなわち、彼らは国家や地方政府の所有を除いて、大土地所有を認めず、これを農民に再分配すること、また大企業を国有化して国家の監督下に置くことを主張した。国家制度に関しては、社会民主党は、議会制をともなった共和制国家の樹立を求めた。また地方には一定の自治権を認めた。

ユーゴスラヴィア・クラブの案

ユーゴスラヴィア・クラブは、スロヴェニア人民党、クロアチア大衆党、ブニェパツ・ショカチ党（パチカ、バナート、スリエム、スラヴォニアに居住するクロアチア人ないしカトリック教徒を代表する組織）の統一会派であり、カトリックの聖職者の代表組織であった。彼らの案の特徴は、住民の宗教を基本に国土を6つの州に分割し、これに広範な自治権を与える点にあった。6つのうち3つは主としてカトリック教徒の州（メジウムーレを含むクロアチアおよびスラヴォニア、ボスニアおよびヘルツェゴヴィナを含むダルマチア、スロヴェニア）であり、3つは正教徒の州（マケドニアを含むセルビア、モンテネグロ、ヴォイヴォディナ、すなわちバナート、パチカおよびバラニーヤ）である。国家機構に関しては、国王、二院制の議会、政府を設置する。また各州には、地方政府と地方議会を設置する。地方政府および地方議会は中央政府の監督の下に一定の自治権を行使する。

クロアチア同盟の案

彼らの案の特徴は、連邦制に近い原則で立憲君主制の国家を組織しようとする点にあった。国土は第一次世界大戦前の状況を受け継いで、マケドニアを含むセルビア、モンテネグロ、ヴォイヴォディナ（バナート、パチカ、バラニーヤ）、ボスニアおよびヘルツェゴヴィナ、クロアチア・スラヴォニアおよびダルマチア、スロヴェニアの6つの州に分けられる。国家行政の事項と権限は共通機関と各州の機関の間で分割される。共通の機関は、国王、二院制の議会、中央政府である。州の機関は、州議会、州政府、州の首長たる総督である。中央政府の管轄下には、外交、軍隊、財政、貿易、郵便、交通がおかれる。中央政府と州政府との間で解決できない対立が生じた場合には、憲法裁判所が調停する。この憲法の変更には各州の同意が必要とされた。

- 21 そのため、当初86条だった憲法草案は、139条に増加した。
- 22 Gligorijević, *Parlament i političke stranke u Jugoslaviji 1919-1929*, p.104-105.
- 23 主として貧農層を代表する農業者党は、旧封建領主に対しては、他に収入源がなく、どうしても生活保護が必要な場合を除いて、土地収用に対する補償金をいっさい支払わないことを主張した。農業者党は政府がこれを認めれば政府案に賛成すると述べたが、パシッチはこの要求を拒否した。ただし農業者党の傘下にあったスロヴェニア農業者党に対しては、3月の内閣改造で農業相のポストを党幹部（イワン・プーツェリ）に与えることで、彼らのグループを与党の陣営に抱き込み、政府案への支持を取り付けた。以上、Gligorijević, *Parlament i političke stranke u Jugoslaviji 1919-1929*, p.100による。
- 24 *Ibid.*, p.10-102. なお土地改革をめぐるキリスト教徒借地農民の利害を代表していた農業者党の要求とイスラム教徒地主の利益を守ろうとするユーゴスラヴィア・ムスリム組織の要求とは相反し、政府が両方の要求を満足させることは不可能であった。むしろ、首相のパシッチのねらいは、両陣営と同時に交渉することで、相手方に別の交渉相手の存在を意識させ、双方からできるだけ多くの妥協を引き出すことにあった。この結果、ユーゴスラヴィア・ムスリム組織との交渉では、実質的には将来の行政単位の設定面で譲歩を与えるだけで、彼らの協力を確保できた。
- 25 ユーゴスラヴィア・ムスリム組織がボスニア・ヘルツェゴヴィナの南スラヴ人のイスラム教徒の政治代表であるのに対して、ジェミイット党はコソヴォやサンジャク、マケドニアなど南セルビアのイスラム教徒の政治代表であり、支持者にはトルコ人を自称する人びとが多かった。憲法制定議会でのジェミイット党の議席は当初、8議席であった。しかし、憲法草案に対する支持の見返りに政府がユーゴスラヴィア・ムスリム組織に一定の譲歩を与えたのを見て、ジェミイット党の影響の下に急進党と民主党に所属する南セルビア選出のイスラム教徒議員12名が独立した行動を起こし、「南セルビアのムスリム」という統一会派を結成した。彼らは、ジェミイット党と連携して、イスラム教徒の宗教的・教育的自治の保証、地方行政機構や議会へのムスリム人の参加、マケドニア、コソヴォ、サンジャクのイスラム教徒地主の土地を土地改革の対象から外すこと、小作人から借地料を得ていない地主に補償金を与えること、キリスト教徒農民によって不法に奪われた土地を元の地主に返還させることを要求した (*ibid.*, p.103.)。
- 26 クロアチア同盟のマテ・ドリンコヴィッチは、憲法制定議会の演壇に立ち、国民クラブの名において、1918年10月29日のクロアチア議会の決議、1918年11月23日の国民評議会の決議、同日セルビア王国との国家統合の交渉のために国民評議会が作成した指針（「ナブタク」）を読み上げ、最後にこう述べた。
「…国民評議会代表団に託されたナブタクはクロアチア議会の決議に基づくものであり、国民評議会の上奏文とセルビア王国の摂政アレクサンダルが述べた答辞によって確定した国家統合を国民評議会が実現していく際の枠組みを示したものである。
憲法制定議会はこうした国家統合の経過を考慮しないばかりか、国家統合の基盤を破壊しようとしている。この議会は、クロアチア人代表の見地をまったく無視して、数の上での多数決によって国民に憲法を押し付けようとしている。国民クラブは、す

でに確定している方針に基づいて政府側が我々と協定に応じ多数決による憲法の決定方法を排除しない限り、この議会の合法性を否定し、クロアチアとクロアチア人に対して効力のある憲法を公布する権利を否定せざるを得ない。たとえ憲法が採択されたとしても、そのような憲法は無に等しく、まったく法的な効力が伴わないものであることをここに宣言する…」(Čulinović, *Jugoslavija između dva rata 1*, p.335-336)。

27 1921年5月、共産党議員団は政府に対して次の要求を出していた。(1)1920年12月に制定された共産党の活動を禁じた政令(「オブズナーナ」)の撤廃、(2)労働組合活動に対する規制の撤廃、(3)閉鎖されていた労働組合の寄宿舎の再開、(4)共産党系出版社の活動の再開、(5)逮捕・拘束されている労働組合員および共産党員の釈放と職場への復帰を認めること、(6)「オブズナーナ」によって労働組合と共産党が被った損害に対する補償。しかしながら、政府はこれらの要求にいっさい応じなかった。共産党は翌6月に再度同じ要求を突きつけたが、政府は門前払いにした。これに抗議するために、6月11日、共産党は議会のボイコットを決め、議会外での活動を宣言した(Gligorijević, *Parlament i političke stranke u Jugoslaviji 1919-1929*, p.107)。

28 同日、ユーゴスラヴィア・クラブは次のような声明を発表した。「…政府与党は今日に至ってもなお我々の見解に耳を貸さず、議員の多数決によって憲法を採択するという憲法制定議会の議事規程をそのままにしてきた。これによって、これはクロアチア人およびスロヴェニア人の多数が反対したとしても、多数派の民族の助けを借りて憲法を採択することが可能になった。…

中央集権制的な国家秩序の採用は国民と国家の結束を強化するどころか、弱体化させると我々は深く確信する。それがゆえに、我々は、国家の内部組織というこのもつとも微妙な問題を、我々の見解に沿って民族間の協議によって政府与党が解決することをこの間ずっと求めてきた。しかし、これまで十分な時間があつたにもかかわらず、政府与党は何もなさなかった。…

それゆえ、三民族(セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人)の一部の賛成によってのみ憲法が採択されることが確実になり、これ以上反対勢力として活動を続けても意味がないことが明らかになった。

したがって、ユーゴスラヴィア・クラブの議員は、国民および国家の結束を真に願う者として、このような憲法の採択に反対し、この憲法の採択が必然的に国民と国家にもたらす厄災に対する責任を負わないようにするため、抗議の意志を込めて、憲法草案の審議と採決が終わるまで、憲法制定議会を欠席する…」(Čulinović, *Jugoslavija između dva rata 1*, p.348)。

29 ユーゴスラヴィア・ムスリム組織は連立内閣の一翼を担っていたが、一時政権の離脱を表明した。事の発端は、1921年5月31日、急進党幹部のミラン・シュルスキッチの議会発言にあった。スルシュキッチは、土地改革に際して、旧封建領主には、一部の貧困層を除いて、補償金の支払いに反対する発言をした。ユーゴスラヴィア・ムスリム組織党首(JMO)のメフメド・スパホはこれを約束違反だとして、首相のパシッチに閣僚を辞することを告げた。急進党はスルシュキッチの発言を党の見解としないうことで、スパホは辞表を撤回したが、このあと、憲法の最終案の中にボスニア・ヘルツェゴヴィナの一体性を脅かすような規定があることを指摘し、政府に見直しを求め

- た。それは、州議会の5分の3の議員の賛成があり、国民議会が承認すれば、別の地域の州との合併ができるという規定であった (Gligorijević, *Parlament i političke stranke u Jugoslaviji 1919-1929*, p.108)。
- 30 このほかパシッチは、採決に際してのスロヴェニア農業者党議員の賛成を確実にするため、利益供与をおこなったとみられている。これをスクープで報道したのはサラエヴォの野党系の日刊紙『ナロード』であった。同紙は、憲法草案の採決の数日前、政府は支持の見返りとして、スロヴェニア農業者党の幹部のボグミール・ヴォシュニャクに対しては重要な外交官の地位を約束し、その他の議員に対してはオーストリアに自由に牛を輸出する許可を与え、この結果、政府は5000万ディナールで10票を買ったと報じた。実際、憲法が採択された数日後、ヴォシュニャクはブラハ駐在の大使に任命された (Horvat, *Politička Povijest Hrvatske 2*, p.206)。
- 31 アレクサンダルの暗殺未遂事件では、犯人の共産党員に20年の禁固刑が言い渡され、共産党議員10名を含む33人が起訴され、2年から4年の禁固刑となった。内相ドラシュコヴィッチの暗殺事件では、暗殺の実行者に死刑、仲間の3人に15年の禁固刑、1人に2年の禁固刑の判決が下った。
- 32 正式名称は「公共の安全と国家の秩序を守る法律」。
- 33 Hrvoje Matković, *Povijest Hrvatske seljačke stranke, Naklada Pavičić, Zagreb, 1999, p.95-96.*
- 34 Gligorijević, *Parlament i političke stranke u Jugoslaviji 1919-1929, p.118.*
- 35 このころ、セルビアの政治指導者にとってステェパン・ラディッチは未知の政治家であり、パシッチらがプロティッチの行動を容認した背景には、ラディッチはどの程度話が通じる男なのかを知りたいという思惑もあった (Matković, *Povijest Hrvatske seljačke stranke, p.98.*)
- 36 Horvat, *Politička Povijest Hrvatske 2, p.216, Čulinović, Jugoslavija između dva rata 1, p.372.*
- 37 以上の経緯は、Hrvoje Matković, Svetozar Pribičević: *ideolog-stranački vođa-emigrant, Hrvatska Sveučilišna Naklada, Zagreb, 1995, p.93.* による。
- 38 Branislav Gligorijević, *Demokratka stranka i politički odnosi u Kraljevini Srba, Hrvata i Slovenaca, Institut savremenu istoriju, Beograd, 1970, p.250.*
- 39 Horvat, *Politička Povijest Hrvatske 2, p.221.*
- 40 以上は主として、Gligorijević, *Demokratka stranka i politički odnosi u Kraljevini Srba, Hrvata i Slovenaca, p.253,* による。少数民族の代表であったプリビーチェヴィッチはクロアチアでは、警察や軍事力を動員した強権政策をとらなければ権力を維持することができなかった。そのため民主党はクロアチアでは「鞭打ち刑の執行者」と揶揄されていた (*ibid.*, p.254)。
- さらにいえば、ユーゴスラヴィア主義を標榜する民主党は、急進党とは異なって、結党当初、旧オーストリア＝ハンガリー領諸地域のクロアチア人やスロヴェニア人も入党していた。しかし、彼らの中からはその後、プリビーチェヴィッチの硬直した中央集権主義と強権主義政策に異議を唱えて民主党を離党する者が多数出た。党首のダヴィドヴィッチは、これ以上離党者を出さないようにするためにも、プリビーチェ

- ヴィッチ派の力を抑え、党の路線を修正する必要があった (ibid., p.258)。
- 41 ヘルツィゴーニャは戦前に諜報機関に属していた人物であり、この金銭は戦前の国家に対する功労に対する報奨として与えられたものであった。機関誌の指摘によれば、暗殺事件のあと、ヘルツィゴーニャは国外に逃亡したが、これには先の金銭的報奨が発覚しないように意図的に逃走の機会が与えられた形跡があった。このことはドラシュコヴィッチ暗殺の背景には結果的にプリビーチェヴィッチが関係していたことを意味し、それゆえ、プロティッチは、プリビーチェヴィッチには道義的責任があることを提起したのである (Horvat, *Politička Povijest Hrvatke 2*, p.218.)。この事件に関しては急進党の思惑どおりに、後に民主党の内部からもプリビーチェヴィッチの責任を問う声が上がった。たとえば、ヴォヤ・マリコヴィッチは党の総務会でこの問題を採り上げ、プリビーチェヴィッチの閣僚辞任を要求した (Ibid., p.225)。
- 42 民主党は、1917年3月のテッサロニキ裁判で有罪となったツルナ・ルーカ (黒い手) 派の将校の恩赦と国防相のゼツエヴィッチ將軍の更迭を求めた (Gligorijević, *Demokratka stranka i politički odnosi u Kraljevini Srba, Hrvata i Slovenaca*, p.119)。ツルナ・ルーカは青年将校を主体に結成された秘密結社であり、1903年に国王アレクサンダル・オブレンオヴィッチとその妻の殺害を実行した。彼らはジュネーブに亡命していたペータル・カラジョルジェヴィッチを国王に迎え入れた。しかし、ペタルの息子の摂政アレクサンダルは、軍部の中でツルナ・ルーカの影響が高まったことに反感を持ち、第一次世界大戦の最中にその指導者を逮捕し、テッサロニキで軍法会議にかけた。ダヴィドヴィッチらセルビアの野党勢力はかねてからこれを冤罪裁判として強く批判していた。
- 43 Matković, Svetozar Pribičević: ideolog-stranački vođa-emigrant, p.94, Gligorijević, *Parlament i političke stranke u Jugoslaviji 1919-1929*, p.119.
- 44 Horvat, *Politička Povijest Hrvatke 2*, p.224.
- 45 Ibid., p.225.
- 46 Ibid., p.225. なおプリビーチェヴィッチ派は、イタリアのファシスト党が作った親衛隊をまねて、オルユナ (Orjuna=ユーゴスラヴィア愛国組織) と呼ばれる党所属の親衛隊を組織した。これとの対抗で、ハナオ (Hanao=クロアチア国民青年)、スルナオ (Srnao=セルビア愛国組織) と呼ばれる団体が出現し、相互の小競り合いはときとして内戦の様相を呈したといわれる (Ibid., p.226)。
- 47 「覚え書き」のテキストはHorvat, *Politička Povijest Hrvatke 2*, p.226-228、に掲載されている。なお「覚え書き」はその後二度書き直されて、そのトーンもずっと控えめになった。
- 48 法律の成立には国王の署名が必要であったが、国王は婚約のためルーマニアに滞在中であり、政府が代理で署名をおこなった。なおこの法律の賛否をめぐる、ユーゴスラヴィア・ムスリム組織は分裂することになった。
- 49 Ibid., p.236-237.
- 50 Gligorijević, *Demokratka stranka i politički odnosi u Kraljevini Srba, Hrvata i Slovenaca*, p.260-261. なおこれに対抗して、プリビーチェヴィッチも自らザグレブに行き、その支持者を集めて櫓を飛ばしダヴィドヴィッチのもくろみをくじこうとした

(*ibid.*, p.261)。

- 51 *Ibid.*, p.269. 興味深いのは、この会議はとくに事前に定められた議題はなく、セルビア人とクロアチア人の相互理解を深めるために、会議に出席していたクロアチア人に「クロアチア人の考えと気持ちを語ってもらおう」ことで始められたことである。二人のクロアチア人がこの役目を引き受けた。一人は、民主党ダヴィドヴィッチ派のトミスラヴ・トムリエノヴィッチであり、もう一人はすでに民主党を離党したジヴァン・ベトリッチであった。

トムリエノヴィッチはセルビア人とクロアチア人の関係がこれほど危機的に悪化した原因をこう語った。彼によれば、セルビア人は最初から征服者のような態度をとったので、クロアチア人は防衛的態度をとらざるをえなかった。彼らがクロアチア人に対する態度には、セルビアの政治的風土や歴史的伝統の影響を見て取ることができる。旧オーストリア＝ハンガリー領出身のセルビア人（プリビーチェヴィッチ・グループ）は極端に反クロアチア政策をとってきたため、クロアチア人とセルビア人の関係はいつそう悪化した。彼らのおかげで、(旧オーストリア＝ハンガリー領出身のセルビア人だけでなく)セルビア人一般がこのような仕打ちを望んでいるとクロアチア人は思いこみ始めた。そこから「民族間の争い」が発生し、それは「国家的規模の争い」に発展した。

トムリエノヴィッチは、クロアチア人の感情を推量して、こう強調した。政治的、行政的な弾圧政策によって、かえってクロアチア人の民族意識が強まり、広がりを見せている。これに反して、王国に対する忠誠とユーゴスラヴィアの理念はどんどん弱まっている。以前はユーゴスラヴィアの理念に献身的であった人びとの間でもこの傾向は顕著である。このような状況のもとで、クロアチア・ブロックのメンバーは固く団結し、「セルビア人の勝手は許さない」という強い態度を示して、セルビア人に対する防衛的な志向が強くなったクロアチア人農民の支持を獲得した。クロアチア・ブロックの最低限の要求は、クロアチアの伝統的な国権に基づく独立性が何らかの形で実現されることであり、その場合には彼らは政権との協定に応じるつもりである。

元民主党員のジヴァン・ベトリッチは、クロアチアの政治的状況をトムリエノヴィッチよりも危機的に見つめていた。彼は、クロアチア問題とその解決策について、クロアチア・ブロックがどのように考えているとみられるかを、会議のメンバーにこう語った。

ベトリッチによれば、クロアチア人の最大の不満の種はセルビアの覇権主義（ヘゲモニー）的態度にある。セルビア人は、行政、外交、軍隊など国家機構のすべての重要な地位を独占する一方で、クロアチア人はこの国家の中では「二級市民」のような扱いを受けている。だから、この国家は「セルビア人の国家」だとクロアチア人は思いこみ始めた。そこで（クロアチア人の権利を主張する）クロアチア・ブロックの活動は民衆の支持を獲得し、彼らの地位は強固になった。しかしながら、クロアチア・ブロックは全体として、またラディッチ自身も、中央集権主義の緩和と自治権の拡大の上に立って、セルビア人との合同国家の形成を望んでいる。彼らが望む国家は、最終的には連邦制または国家連合的な国制をとる国家である。クロアチア・ブロックは、（旧オーストリア＝ハンガリーからクロアチア国家の独立をクロアチア議会が宣言し

た) 1918年10月29日以降に成立した協定や法制をすべて無効にし、セルビア人とクロアチア人との民族間交渉を最初からやり直すことを求めている。

ベトリッチの考えでは、次の選挙が実施されるまでは、クロアチア・ブロックとの合意は無理だろうということであった。しかし、会議の参加者の興味を引いたのは次の発言である。クロアチア・ブロックは、ベオグラードに向かうための機会と仲介者を求めている。ラディッチとクロアチア・ブロックがベオグラードに来ればただちに選挙が告示されるだろうが、現状では彼らは議会に参加することはできない。なぜなら、それは国家の現状を認めることになるからだ。しかし、ラディッチは、セルビア人が選挙のあと国制の再編に向けてイニシアチブをとってくれるのを待っている。彼はそれまで現在の方針を堅持し、クロアチア人の意向を満たしてよいという立場からクロアチア人と交渉する意思のある有力なセルビア人政治集団が現れるのを待っている。

ベトリッチの報告は、部分的にせよクロアチア・ブロックの見解をよく伝えていた。しかし、会議の出席者のほとんどは単一の国民国家を擁護する見解をもっていたので、ベトリッチの見方を討論の前提にすることはできず、むしろクロアチア・ブロックの「分離主義活動」を批判するような意見を多く述べた。もっとも、別の方向での解決策を求める意見があった。セルビアの著名な地理学・民族学者であるヨワン・ツヴィイッチはこう尋ねた。「少なくとも三分の一のクロアチア人から同意を獲得して、協定を結ぶ方法はないか」。ベトリッチはこう答えた。ありうるすすれば、それは、セルビア人とクロアチア人が連合市民政党建成するか、クロアチア人に恩恵をもたらすような政権交代がおこなわれることだ。

今後の行動に関しては、会議の出席者からは、似かよった綱領をもった既存の政党を一つにまとめようとの提案があった。そのためには、クロアチア・ブロックの一部（おそらくクロアチア同盟をさす）を、ラディッチ、つまりクロアチア共和農民党から引き離すことが緊急に必要なということになった。以上、ibid., p.269-271、による。

52 Horvat, *Politička Povijest Hrvatske* 2, p.238.

53 Gligorijević, *Demokratka stranka i politički odnosi u Kraljevini Srba, Hrvata i Slovenaca*, p.273.

54 Ibid., p.275.

55 Ibid., p.277.

56 Ibid., p.278.

57 Ibid., p.278-279.

58 Ibid., p.276.

59 Ibid., p.280.

60 Ibid., p.288.

61 国家統合時に皇太子で摂政を務めていたアレクサンダルは、1921年8月、父親のペータル1世の死により、王位を継承した。

62 Ibid., p.289-290.

63 以上は、Matković, *Svetozar Pribičević: ideolog-stranački vođa-emigrant*, p.102, Gligorijević, *Demokratka stranka i politički odnosi u Kraljevini Srba, Hrvata i*

Slovenaca, p.292-293、による。

- 64 Matković, Svetozar Pribičević: ideolog-stranački vođa-emigrant, p.103. なおこの会議の決議によって、「党総務会と議員クラブが決定を下すまで閣僚の仕事はできない」と表明してプリビーチェヴィッチ派の閣僚が出していた辞表も撤回されたと考えられる。
- 65 Ibid., p.103.
- 66 Gligorijević, Demokratka stranka i politički odnosi u Kraljevini Srba, Hrvata i Slovenaca, p.293.
- 67 Matković, Svetozar Pribičević: ideolog-stranački vođa-emigrant, p.103.
- 68 Gligorijević, Demokratka stranka i politički odnosi u Kraljevini Srba, Hrvata i Slovenaca, p.294-295.
- 69 Ibid., p.296.
- 70 グロルとミハイロヴィッチは、セルビアの世論とダヴィドヴィッチの情勢判断を、クロアチア・ブロック代表に詳しく説明した。彼らによれば、パンッチ政権に対する不満はセルビアの民衆の間にも広まっている。他方、セルビア人は、どうしてクロアチア人がセルビア人を敵のように考えているのか理解できないし、どうしてクロアチア人が議会に出席してその要求をはっきりと述べ、兄弟民族として話し合いで問題を解決しようとしぬのか理解できないでいる。セルビア人はクロアチア人が考えるような意味での君主制主義者ではない。セルビア人が国王を支持するのは、国王が権力と統一の象徴であるからだ。セルビア人は憲法を支持しているが、これは市民的権利の保障を憲法の中に見いだしているからであり、この憲法に支障がある場合にはただちにこれを見直す用意がある。ただその際、大きな緊張や衝突が起きるのを避けたいだけだ。グロルとミハイロヴィッチは、セルビアの覇権主義についても言及した。セルビアの覇権主義の起源はセルビアの国家観念（＝大セルビア国家の樹立）にあり、急進党はこれにとらわれている。これに対して、我々ダヴィドヴィッチ・グループはクロアチア人が協定を結ぶには都合がよい相手である。我々はこのような国家観念にとらわれていないし、クロアチアにこのような国家観念を持ち込むつもりはない。むしろ、我々はクロアチアに一定の自治権を認める立場である。グロルとミハイロヴィッチは、クロアチア・ブロックの議員が議会に現れれば現在の政権は必ず崩壊する、国王の反対は心配に及ばないと、ラディッチの懸念を懸命に払拭しようとした。以上、ibid., p.298、による。
- 71 Ibid., p.299.
- 72 Ibid., p.299.
- 73 Ibid., p.301.
- 74 この直前に、ラディッチは、セルビア世論の懸念の払拭をねらって、旧セルビア王国のセルビア人に向けて次のようなメッセージを送った。「クロアチア・ブロックが第一に要求するのは、現行の政権の交代と選挙の告示であるが、これは現行のパンッチとプリビーチェヴィッチの政権がセルビア世論の支持を失っているためだ。セルビア人とクロアチア人が協定に向かうためには何よりも自由な選挙が必要だ」(Horvat, Politička Povijest Hrvatske 2, p.242)

- 75 ベオグラードではクロアチア・ブロックのもう一人の幹部のマツコ・ラギーニャが彼らと合流した。ラギーニャは1920年にクロアチア総督を務めたクロアチア同盟の幹部であり、セルビアの政治指導者の間でもよく知られたクロアチア人政治家であった。
- 76 ところで、このころ、ダヴィドヴィッチ派との交渉を進めるラディッチらの方針に対して、クロアチア・ブロック内ではクロアチア権利党の代表が異議を唱えた。11月18日のクロアチア・ブロック中央委員会で彼らはこう主張した。クロアチア問題はクロアチアの国権を前提とする「国際問題」であって、それはクロアチア議会代表とセルビア議会代表との国家間交渉によってのみ解決が可能である。したがって、ラディッチが進めているセルビア国内の一部の政治指導者との話し合いは意味がない。彼らは、クロアチア権利党はダヴィドヴィッチ派やセルビアの野党指導者との会談には参加しないと表明した。ラディッチは、クロアチア権利党が突然反対を唱えだしたことに激怒した。彼は、その背景には、ウィーンやブダペストに亡命していた旧オーストリア＝ハンガリー帝国軍のクロアチア人将校の勢力と結託しようとするグループがクロアチア権利党内で影響力を強めていることがあるとみていた。ラディッチは、クロアチア権利党指導部はクロアチア人の政策ではなく、外国の政策を遂行しようとしていると非難し、クロアチア権利党をクロアチア・ブロックから除名することを中央委員会に提案した。これは採択されたため、クロアチア権利党の代表（ヴラディミール・プレバグ、アンテ・パヴェリッチ、アウグスト・コシュティッチ）は会議を退席した。11月25日、ラディッチはクロアチア・ブロックの議員会議でクロアチア権利党の除名理由をこう説明した。「(彼らの主張である)クロアチア人ラジカリズムが障害だったのではない。障害であったのはフランク派だ。彼らはクロアチアの政策に発言権はない。クロアチア人はクロアチアの中に頭をもっている。けっしてブダペストやウィーン、ローマに頭をもっているのではない」(Gligorijević, *Demokratka stranka i politički odnosi u Kraljevini Srba, Hrvata i Slovenaca*, p.302-303)。
- 77 ラディッチの発表によれば、この政府はただちに選挙の告示をおこなう。この政府は、イタリアおよびハンガリーに対しては、友好的ではあるが断固とした態度をとる。またこの政府にはクロアチア・ブロックの代表は入閣しないが、クロアチア、ダルマチア、ボスニア・ヘルツェゴヴィナの地方行政機構を改革するという課題をもつ (*ibid.*, p.303)。
- 78 *Ibid.*, p.304. スラヴォンスキーブロードの首脳会談が中止になった決定的要因は、国王アレクサンダルの意向であった。アレクサンダルが側近に示したメモによれば、彼は、クロアチア・ブロックの議員が議会に来て国王に忠誠を誓えば、パシッチ政府に辞職を迫り、ダヴィドヴィッチを首班指名するつもりでいた。ただし、これには前提条件があった。それは、クロアチア・ブロックがヴィーンドヴァン憲法にもとづく秩序を全面的に認めることであった。これは、憲法修正どころか、クロアチア・ブロックのいかなる要求も認めないことを意味していた (*ibid.*, p.304-305)。
- 79 クロアチア・ブロックにとって、その政治的目的や利益を達成するためには、プロティッチよりもダヴィドヴィッチを主要な交渉相手とする方がはるかに好都合であった。その理由は、第一に、ダヴィドヴィッチは、将来のセルビアークロアチア関係や

国家制度について事前に条件を付けたり、申し合わせをおこなうことなく、政権打倒のために、クロアチア・ブロックの協力を求めていることであった。これに対して、プロティッチは独自の憲法案を基礎に、憲法修正について事前に協定をおこなうことを求めている。しかし、クロアチア・ブロックにとって、当面必要な事柄は、現在の政権が打倒され、これに代わってリベラルな政権が誕生することであった。彼らは、そのもとで自由選挙をおこない、勢力を拡大した上で、より有利に交渉を運ぼうと考えていた。したがって、プロティッチと事前に協定を結ぶことは避けたかった。第二に、政権打倒はダヴィドヴィッチと手を結ぶ方がはるかに容易であった。ダヴィドヴィッチが決起し、民主党が分裂すれば政権はすぐに崩壊することが見込まれたからである。これに対して、プロティッチは急進党の中では少数派であり、政権に対する影響力は小さかった（以上、*ibid.*, p.305-306）。

80 *Ibid.*, p.307.

81 *Ibid.*, p.308.

82 *Ibid.*, p.309. この手紙の中でラディッチは自らの見解をこう述べた。クロアチア・ブロックは議会主義の原則に立っている。しかし、国民議会の議員の多数は強権と腐敗を特徴とする現在の政権を依然として支持している。したがって、この形勢を逆転させるもっとも確実な方法は、議会の外で協定実施の手段を準備し、民族政策および社会政策に点で進歩的な見解をもつ自由主義的で道徳観のある勢力が議会で優勢になることを目指すことである。…それゆえ、最適の方法を述べたい。ゼムンでもベオグラードでもよい。一刻も早く（反対勢力の）首脳会談を開き、進歩的な民族政策および社会政策をもつすべての野党指導者が協定を締結するための方法を一緒にさがすことである。この協定が成立すれば現在の政権は自ずと崩壊していくだろう（*ibid.*, p.310）。

83 *Ibid.*, p.311.

84 *Ibid.*, p.314-315.

85 *Ibid.*, p.316-317.

86 *Ibid.*, p.317.

87 それゆえ、立法委員会での議論は、主として民主党議員同士の間での非難の応酬となった。その当事者の一人であるダヴィドヴィッチ派のパヴレ・アンジェリッチは、プリビーチェヴィッチ派とダヴィドヴィッチ派の議員では民主主義の理解の仕方に相違があることを指摘し、こう述べた。「私は民主党の議員として、また民主党総務会のメンバーとして、この規定が民主党の側から提案されたという発言を否定する。この前の委員会審議でのプリビーチェヴィッチの発言は民主主義にもとるものである。プリビーチェヴィッチは、メッテルニヒ公爵の政治学校で訓育を受けた人物のようだ。彼は、スヴェトザール・マルコヴィッチの政治学校で訓育を受けた我が国の政治家とは異なる人物である。我が国の政治家は進歩的な思想の持ち主であるからだ。彼がこのような規定を求めるのは驚くにあたらない。それは、これこそが権力の座にとどまる方途だと彼は考えているからだ」。これに対して、プリビーチェヴィッチ派のイヴォ・マティッチはこう述べた。「決定は党の議員クラブで下されており、あなたはこれを遵守しなければならない」。しかしながら、アンジェリッチはこう反論した。

「メッテルニヒ公爵の政治学校で訓育を受けたような方々がおこなった決定に私は拘束されない。このような規定が法律として委員会で採択され、議会での採決に付されるとしたら、立法委員会の委員であることに恥辱を感じる」。イヴォ・マティッチはこう野次った。「では民主党にとどまることにはあなたは恥辱を感じないのか」。アンジェリッチはこう切り返した。「民主党はプリビーチェヴィッチ兄弟やあなた方が代表する党ではない。このような規定を了承した決定に私は恥辱を感じるし、このような決定をおこなった党が民主主義の党を名乗らないように、そのような主張と提案をおこなった者が民主主義者ではなく、反動政治家と呼ばれるように全力を挙げるつもりだ」(ibid. p.318)。なお上述の文章の中に出てくるメッテルニヒ公爵 (1773-1859) はナポレオン戦争後にウィーン会議を主導したオーストリア帝国の首相であり、警察と検閲で自由主義運動を弾圧したことで有名であった。またスヴェトザール・マルコヴィッチ (1846-75) は19世紀半ばに活躍したセルビア最初のマルクス主義の思想家である。セルビア人を含めたバルカン諸民族の解放のためには、民主的なバルカン半島の統一が必要であると主張し、ニコラ・パシッチなど急進党の創設者を始め、セルビアの政治指導者に大きな影響を与えた。

- 88 Ibid., p.319. パシッチはこう述べた。「我々の連立パートナーは、憲法を変更しようとしているのか否か答える義務がある。民主党がおこなっているクロアチア・ブロックとの交渉は連立関係と祖国にそむく許し難い行為だ。…我々のはもはや我慢することができない。これには決着をつけなければならない。ザグレブから知らせが入っている。敵は、国家保護法を廃止し、共産主義者を議会に呼び戻そうともくろんでいるとのことだ」。しかし、これを聞いたクロアチアの民主党員は、この噂を断固として否定するようにダヴィドヴィッチに求めた。以上、ibid., p.319。
- 89 Ibid., p.319-320. 民主党の閣僚は自党の議員クラブでの議論が決着するまで辞表の提出は待つてほしいと述べたが、急進党の閣僚はこれに反対し、ただちに辞表を提出することを求めた。
- 90 Ibid., p.320. 内閣の総辞職に際し、パシッチは国王の理解を得ようと努めた。パシッチは辞職の理由を国王に次のように説明した。このたびの内閣の辞職は議会政治の危機によって不可避的になった。これは民主党が分裂し、その一部のグループがこれまでの政策を放棄したことによって引き起こされた。その結果として、政府の政策は(ダヴィドヴィッチ派の議員の反対によって)議会で阻まれている。さらにパシッチは、ダヴィドヴィッチがクロアチア・ブロックに対しておこなっている交渉の危険性、とりわけクロアチア共和農民党との協定が成立した場合の危険性を、国王に強く訴えた。なぜなら、クロアチア共和農民党は単一国家制度を否定し、連邦制に基づいて国家を構成することを求めているからであった。以上、ibid., p.320。
- 91 Ibid., p.321, Matković, Svetozar Pribičević; ideolog-stranački vođa-emigrant, p.106.
- 92 Matković, Svetozar Pribičević; ideolog-stranački vođa-emigrant, p.106.
- 93 Gligorijević, Demokratka stranka i politički odnosi u Kraljevini Srba, Hrvata i Slovenaca, p.322. 他方、ダヴィドヴィッチらは、自分たちの活動の成果として、分離独立主義者のクロアチア権利党との関係をラディッチが断ったことを強調した。

- 94 Ibid., p.322-324 なおこの日の総会には11名の議員が欠席していた。全議員が出席していたとしたら、決議案の採決における賛否の差は変わっていた可能性があった (Matković, Svetozar Pribičević; ideolog-stranački vođa-emigrant, p.107)。
- 95 Gligorijević, Demokratka stranka i politički odnosi u Kraljevini Srba, Hrvata i Slovenaca, p.325.
- 96 Ibid., p.327.
- 97 Ibid., p.327-328.
- 98 Matković, Svetozar Pribičević; ideolog-stranački vođa-emigrant, p.108.
- 99 Gligorijević, Demokratka stranka i politički odnosi u Kraljevini Srba, Hrvata i Slovenaca, p.328.
- 100 Ibid., p.329.
- 101 Ibid., p.331. 後年、プリビーチェヴィッチが語ったところによれば、「国王は明らかにパシッチと談合し、民主党を政権から排除しようとした」のであった (Svetozar Pribičević, Diktatura kralja Aleksandra, Beograd, 1953, p.146)。